

學校  
家庭

兒童百話

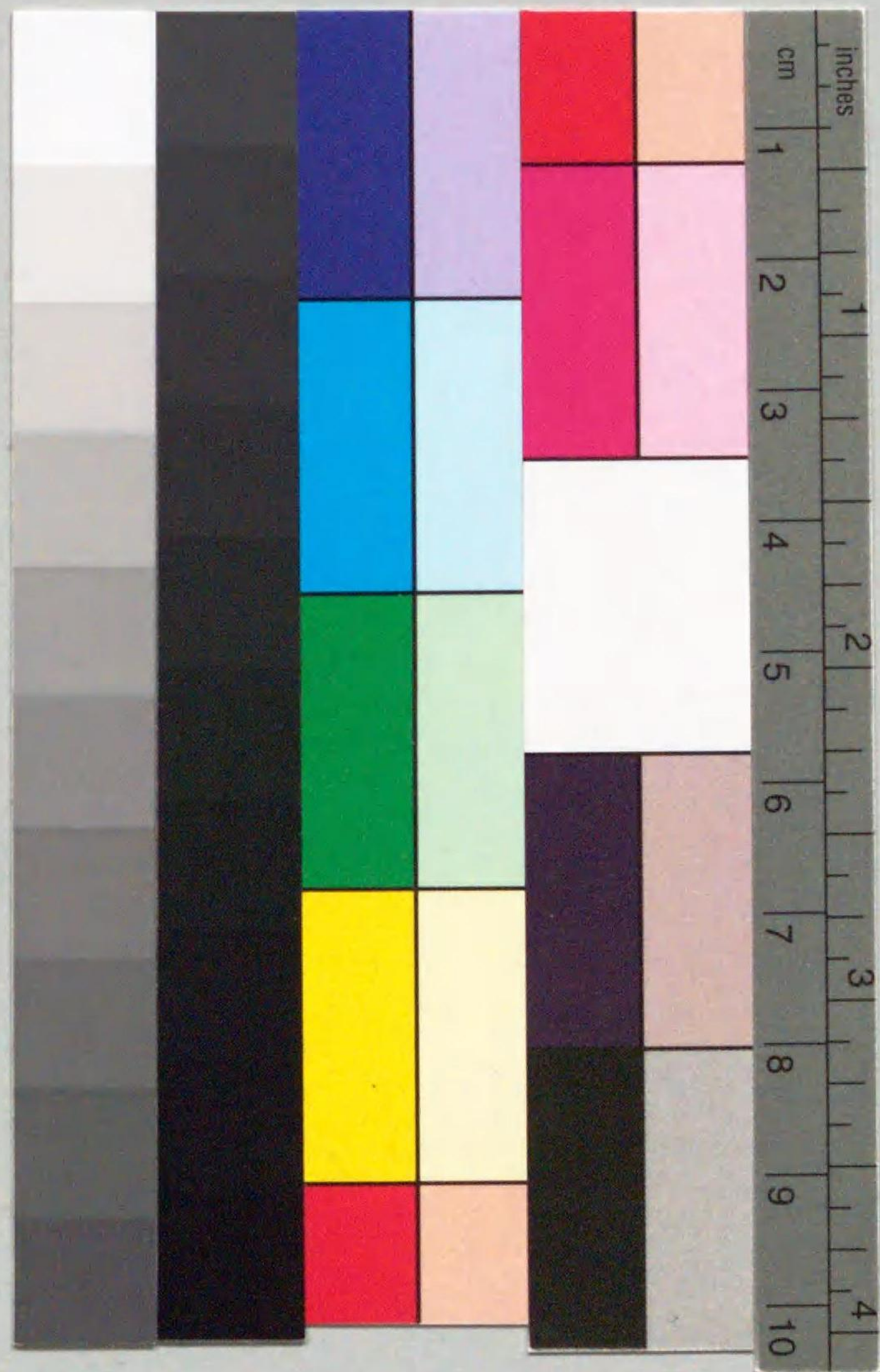
續編

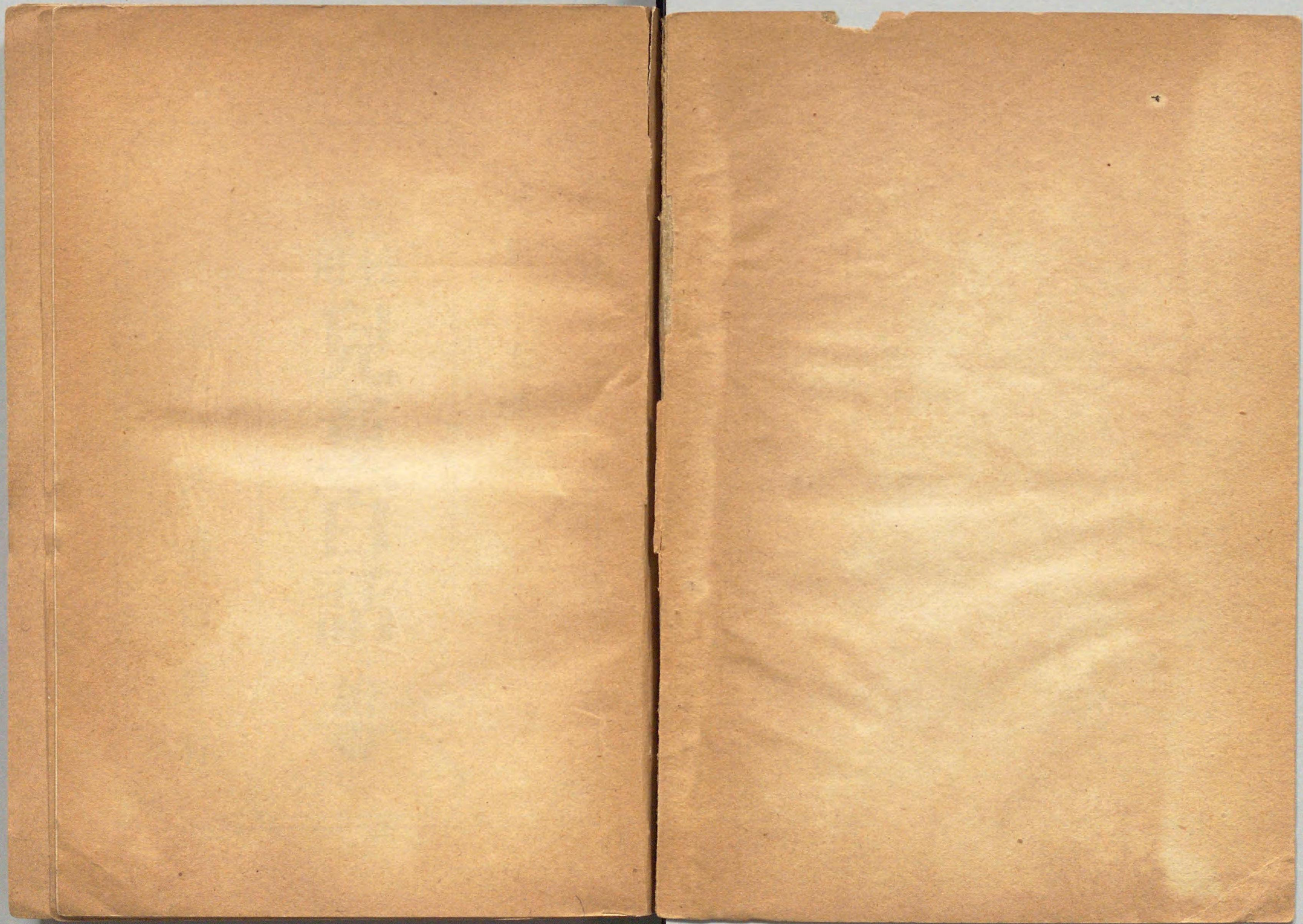


特53-814



1200500909010





特53 : ~~特63~~  
814 ~~382~~

西川三五郎編

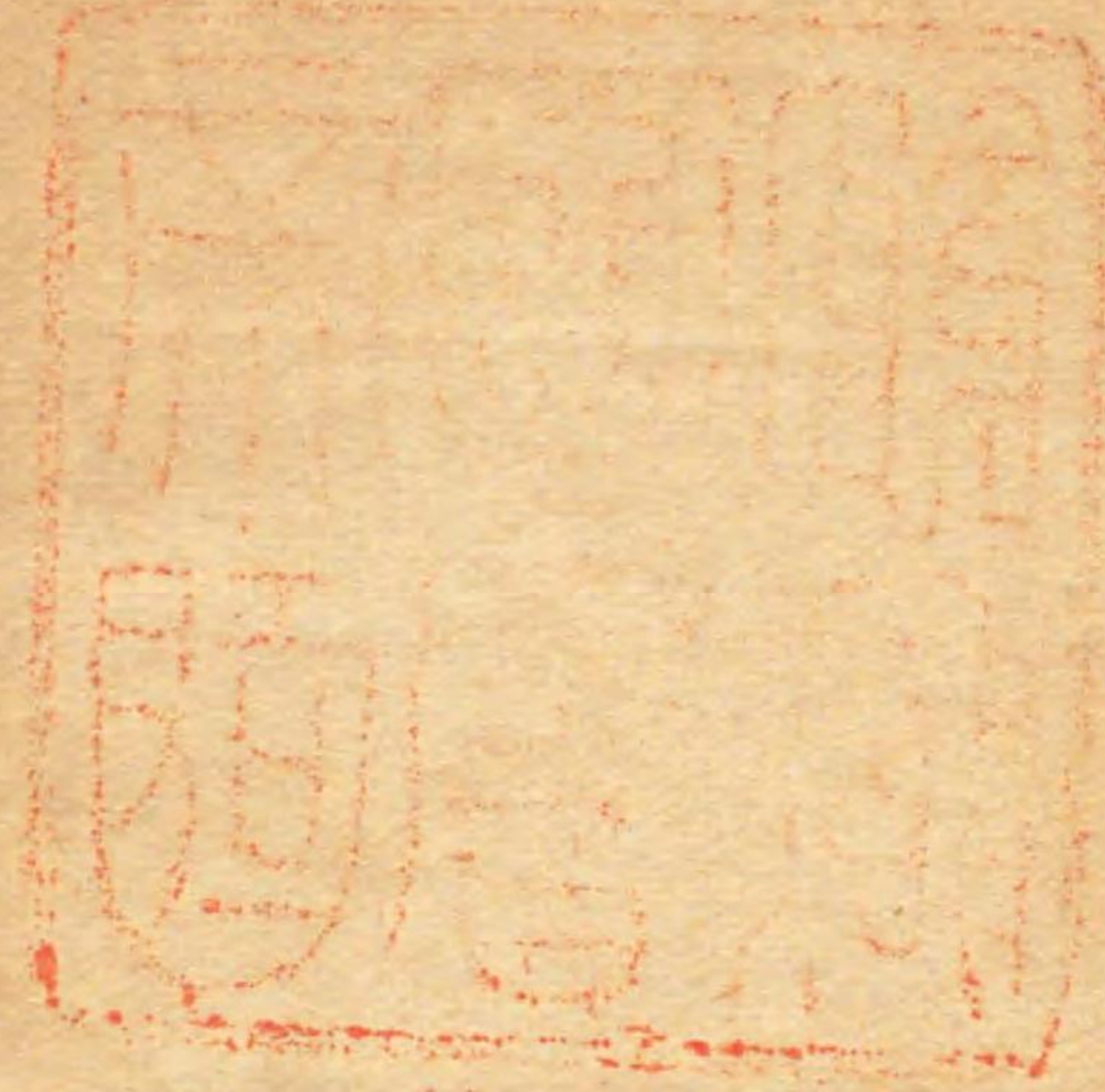
學校  
家庭

# 兒童百話

續編

43. 8. 17

東京 文盛館發行



はしがき

われ曩に少年少女の讀物として、古今聖賢の逸話、傳説、  
寓話等約百餘種を蒐め、兒童百話と題して之を編述せしが  
幸にして讀者諸君の歡迎を得、忽にして十數版を重ねる  
に至つた。

今又茲に嶄新にして最も趣味あるもの百餘種を蒐めて續編  
を刊行した。前編を愛讀せられたる讀者は、必ず又續編を  
愛讀せらるべきを確信す。

學校家庭 兒童百話續編 目次

一	蛙 <small>かはす</small> の自慢 <small>じまん</small>	一
二	黄金 <small>わうごん</small> の卵 <small>たまご</small>	二
三	樂 <small>らく</small> は苦 <small>く</small> の種 <small>たね</small>	三
四	猿 <small>さる</small> の手習 <small>てならひ</small>	四
五	軍馬 <small>ぐんば</small> の歎息 <small>たんそく</small>	四
六	蛙 <small>かはす</small> の奸計 <small>わるだくみ</small>	六
七	巡查 <small>じゆんさ</small> の裁判 <small>さいばん</small>	七
八	瞽者 <small>びつこ</small> と盲人 <small>めくら</small>	九
九	小野 <small>おの</small> の道風 <small>だうふう</small>	一一
一〇	鏡 <small>かみ</small> の教訓 <small>きやうくん</small>	一二
一一	鹿 <small>しか</small> の悪友 <small>あくゆう</small>	一三

今や世界の文明は侵々として長足の進歩をなし、其の停止する所を知らざらんとす、我國に於ける少年少女諸君は、大に活智識を收得して將來の國民たるべき準備と覺悟となるべからず。讀書は則ち其の一である。

明治四十三年七月

編者しるす

三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六
洋燈の宏言	孔雀の不平	笛吹漁夫	勇壯なる行爲	慾張子供	獸の王様	老人の訓言	旅順閉塞隊	鴉の智慧	コルネリアの王	慾張老爺	二匹の蛙	小僧の夢助	蘭丸の頓才
六五	六三	六二	五八	五七	五六	五四	五〇	四九	四六	四四	四三	三九	三八

二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二
狐の大失敗	鼠の相談	子供の争	口の誠	可憐の猿	二人の童子	騎兵と馬	一人の獵師	テモケレスの劍	三人の子供	獅子の臨終	牛小屋の鹿	旅人と熊	風の神様
三六	三五	三三	三二	三一	二九	二八	二七	二二	二一	一九	一七	一五	一四

六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四
犬 <small>いぬ</small> の影 <small>かげ</small>	龜 <small>かめ</small> の失 <small>しつぱい</small> 敗 <small>ばい</small>	義 <small>よし</small> 貞 <small>さだ</small> の勤 <small>きん</small> 王 <small>わう</small>	ネルソンの幼 <small>えうじ</small> 時 <small>じ</small>	膳 <small>か</small> 巴 <small>は</small> 提 <small>てい</small> 使 <small>し</small>	惡 <small>いた</small> 戲 <small>げ</small> な <small>な</small> 狼 <small>おほかみ</small>	平 <small>たひら</small> 重 <small>しげ</small> 盛 <small>もり</small>	家 <small>いへ</small> 鼠 <small>ねづみ</small> の自 <small>じ</small> 慢 <small>まん</small>	熊 <small>くま</small> の博 <small>はく</small> 愛 <small>あい</small>	象 <small>ぞう</small> の目 <small>め</small> 方 <small>かた</small>	鼠 <small>ねづみ</small> の大 <small>たい</small> 將 <small>しやう</small>	雀 <small>すずめ</small> の仇 <small>あだうち</small> 討 <small>うち</small>	頓 <small>とんち</small> 智 <small>ち</small> の小 <small>こ</small> 判 <small>ばん</small>	小 <small>こ</small> 供 <small>ども</small> と蛙 <small>かむす</small>
一四三	一四二	一三八	一三七	一三六	一三〇	一二九	一二七	一二六	一二三	一二二	一一五	一一三	一一二

五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇
蚊 <small>か</small> の自 <small>じ</small> 慢 <small>まん</small>	驢 <small>ろ</small> 馬 <small>ば</small> の無 <small>む</small> 分 <small>ぶん</small> 別 <small>べつ</small>	金 <small>きん</small> 鷄 <small>し</small> 動 <small>くん</small> 章 <small>しょう</small>	北 <small>ほく</small> 條 <small>じょう</small> 時 <small>とき</small> 宗 <small>むね</small>	楠 <small>くすのき</small> 正 <small>まさ</small> 行 <small>つら</small>	龜 <small>かめ</small> と鷺 <small>わし</small>	十 <small>じゅう</small> 人 <small>にん</small> の王 <small>わう</small> 子 <small>し</small>	貞 <small>てい</small> 女 <small>ぢよ</small> の <small>はなし</small> 話 <small>わ</small>	漁 <small>ぎよふ</small> 夫 <small>ふ</small> の喜 <small>き</small> 愛 <small>い</small>	道 <small>だう</small> 樂 <small>らく</small> 息 <small>むす</small> 子 <small>こ</small>	正 <small>しょう</small> 直 <small>ちき</small> な羊 <small>ひつじ</small> 飼 <small>かひ</small>	狐 <small>きつね</small> の卑 <small>ひきやう</small> 怯 <small>けう</small>	兎 <small>うさぎ</small> の主 <small>しゅ</small> 張 <small>ちやう</small>	春 <small>かす</small> 日 <small>が</small> 局 <small>のつ</small> の忠 <small>ね</small> 義 <small>ちうぎ</small>
一〇六	一〇五	一〇五	一〇〇	九九	九八	八二	八〇	七九	七八	七二	七二	七一	六六

六八	青年と猫	一四三
六九	烏の失敗	一四四
七〇	高綱の先陣	一五一
七一	武藏坊辨慶	一六〇
七二	繼母の悔悟	一六九
七三	九郎義経	一七九
七四	頼光の鬼征伐	一八六
七五	小僧の頓智	一九八

目次終

學校家庭 兒童百話 續編

西川三五郎編

一 蛙の自慢

ある蛙かはずが沼ぬまから這はひ出だして、大勢おほせいの獸けものに向むかひ、僕ぼくは世界せかい第一だいいちの豪えらい醫者いしやである。どんな病氣びやうきでも治なほしてやると大聲おほこゑで、どなつて居ゐますと、獸共けものどもは大へんに感心かんしんして豪えらい學者がくしやだと賞ほめて居ゐました。すると狐きつねがそれを聞きいて、側そばへとんで來きて、

マア、蛙先生かはずせんせいそらいふ御自分ごじぶんの跋びつこや體からだの皺しははどうしたのだ。それすら直なほすことが出で來きぬ癖くせに、あまり大おほきな言ことを云いひたまふな



とやりこめました。  
自分の事を棚にあげて、人の事をたゞそらとするのは間違つた考です。

### 二 黄金の卵

或人が一羽の鷺鳥を飼つて居ましたが、其の鷺鳥は毎日一ツ宛黄金の卵を産みますので、殊の外大切に居ました。  
ところが其後段々慾が増長し、こんな卵を産むからには、さつと腹には黄金の大塊があるに相違ない。こんなに毎日一つ宛取つて居るよりはいつその事一時に取出して見やうと思つて、或る時鷺鳥を殺して見ると、さて何にも見つからなかつたので大そら失望したといふ事です。

### 三 樂は苦の種

一匹の牡牛が農具を體に結びつけられて田を耕して居るのを見たら一匹の子牝牛が、

お前さんは、さうやつて苦んで働かなければならんとは何といふ因果な事でせう、私共は此通り毎日樂をして遊んでばかり居るので。

と、申しました。

程なく小屋へ歸つて牡牛は農具を取外し、子牝牛は繩をつけられてお祭の犠牲として殺される爲め祭壇へ引張られてまゐりました。

牡牛は此の様子を見て居りましたが、笑ひながら、子牝牛に向つて  
そらお前を遊ばせて置いたのは、今日犠牲にする爲なのだ、お

前こそ實に氣の毒なものだ。  
と、申しました。  
人も遊んで樂をして居れば必ず非常な苦を受けるやうになります。

四 猿の手習

加藤清正は朝鮮征伐の時、虎をつき殺しました強い大將であります。  
又本を讀んだり習字をしたりすることも大へん好きで文武兼備の勇將でした。  
清正の家には一匹の可愛い猿を飼つてありましたが、清正の机の上にある本に、しきりに手習をして居ました、すると清正はニコニコ笑つてお、猿も手習をするか感心だ……といはれました。

五 軍馬の歎息

一匹の軍馬がありました、年寄つて體力が衰へて來たので、戰場へ出る事が出来ませんから、或る製粉屋へ雇はれましたが、夫からは毎日挽臼を廻させられるので、なか／＼樂ではありません、前の身分に比べて餘り情ない零落だと思ひながら製粉者に向つて云ひました。

モシ／＼製粉屋サン俺が戰場に出て居た時は何時も胸から尾の方まで立派な鎧で身を堅めて一人づゝ御者を供につれて勇ましく押歩いたものだ、夫れに年寄つたからとは言ひながら、戰場を捨て製粉屋の磨粉馬になるとは、實に悲しくて堪らない。  
と、愚痴を溢しました。

その時製粉屋は之を慰めて、

そんなに昔の事をクヨクヨ言つても仕方がないよ、運の善くな

つたり、悪くなつたりするのはお前ばかりぢやない、生物は皆誰でも同じ事だ。

と、申しました。

皆さん此の軍馬のやうに愚痴を溢してはいけません。

### 六 蛙の奸計

常に陸にはかり棲んでゐる鼠が、運悪く不蘭池にのみ住つて居る蛙と懇意になりました。蛙は一つの悪い企をして自分の足へ確と鼠の脚を紐で結付け、二匹つながつて、先づ第一に自分等の常に餌を漁る牧場へ鼠を連れて行き、それから段々自分の住居として居る池の方へつれて行きました。

そして池の極岸へ来た時、急に蛙は身を跳らして水の中へ飛び込み

鼠と共に引摺り込んで、さも面白氣に、

どうぞ己れの智慧を見てくれ。

と、言はぬばかりにグワツ／＼と鳴きながら泳ぎ廻りました。

かわいさうに鼠は忽ち水に溺れて死んで仕舞ひましたが、其の死骸が蛙の足に結び付けられて浮んで漂つて居りますと、一羽の鷹がこれを見付けて、足に爪を引掛けて夫れを浚つて空高く翅りました。此時にも蛙の脚は鼠の脚へ結付けてありましたから鼠と共に鷹に浚はれて到頭其餌食となつたさうです。

### 七 巡査の裁判

倫敦の或るせまい町を一人の小供の煙筒掃除人が歩いて居ましたがやがて一軒の料理屋の前に來ました。すると此男は先刻からお腹が

空腹すいてたまらなくなつて居ゐましたけれども、ポケットにはたつた二銭せんしかお錢あしがありませんのでどうする事ことも出来できませんでした。仕方しかたがないものですから、其料理屋そのりやうりやの前に立たつて、其料理そのりやうりの香にほひをかいで居ゐりました。

處ところへ不意ふいに料理人りやうりにんが飛とび出して、

やい小僧こぞう、貴様きさまは料理りやうりの香にほひをかいだから代だいを拂はらはなければならぬ。

と、申出まうしだしました。小供こどもはお錢あしがないのでどうすることも出来できず、大たいそう弱よわつて居ゐりました。やがて巡査じゆんさが其處そこを通とほりかゝりましたので之これを訴うったへますと、巡査じゆんさはしばらく考かんがへて居ゐりましたが、やがて小供こどもに向むかつて、

お前まへはお錢あしをもつて居ゐるか。

と聞ききますと小供こどもは、

一二銭せんだけもつて居ゐります。

と、答こたへました。すると巡査じゆんさは

その錢あしをお出だしなさい、そして手ての上うへにおのせなさい。

と、申しましたから、子供こどもは其通そのとほりにお錢あしを手ての上うへに載のせて出だしました。そして其のお錢あしを振ふつて音おとをさせました。スルト巡査じゆんさは料理りやうり番ばんに向むかつて、

料理番りやうりばんお前まへは、料理りやうりの香にほひをかいだから其その代だいを取とるといふのだから只今ただいま此小供このこどものお錢あしの音おとで其その代だいは澤山たくさんだ。

と、いつて裁判さいばんいたしました。

何んなにと面白おもしろい裁判さいばんではございませんか。

八 壁者びつこと盲人めくら

或る處に覺者と盲人とがありました。そして二人で連れ立って旅行  
 いたしました。まもなく一つの川に行きかゝり二人ともどうするこ  
 ともできず大そう當惑いたしました。そして其川はさまで深くもな  
 く、他の人々は何の苦もなく渡つて行くのです。併し此二人は覺者  
 と盲人とですから、いかにも渡ることができないのです。他の人々  
 は此二人が川原に立つて迷つてゐるのを見てどんなにして渡るでせ  
 うと思つて見て居ました。  
 すると、やがて覺者は盲人に向つて、  
 盲人君大そう氣の毒だが僕は眼がよく見えるから、君は僕をお  
 ぶつて此の川を渡つてくれないか、僕の眼と君の足とを合せて  
 相助けて渡らなければ此河を渡る事は六ヶ敷のだ。  
 と、申しました。盲人は之を聞いて大そう感心してそれは容易なる



小野道風

事ですとて裾を折り杖を腰にさし、壁者の方に背を向けて、屈みながら其の手に取つて脊負ひ河の中に入りて兩人とも難なく向ふの岸に達したといふ事です。  
 何んと智慧のある仕方ではありませんか。

### 九 小野道風

昔、小野道風とて字を書くのに大へんに上手な人が居られました。ある雨の降る日、自分の部屋でお手習をしてゐましたが、やがて傘をさして御庭を散歩して御池の處へ出かゝりましたら、其の池のまわりに植へてある柳の枝が池の中へ下つて居りました。其の枝へ一匹の蛙が飛びつかんとしては落ち、飛びつかんとしては落ち、幾へんも、飛びつかずには落ちました。

蛙は幾たびも落ちても懲りず、一生懸命になつて飛び付きました。トウ〜飛び付くことが出来て、枝をつたつて上にのぼりました。道風はそれを見て大へんに感心せられ、自分も又室へ入つてお手習を勉強せられましたゆえ、名高い人になられました。

一〇 鏡の教訓

昔、或る家に容貌の極めて醜い娘と又大そう美しい男兒とが居りました。此二人の姉と弟とが一日お母さんの鏡臺の前に遊んで居りました時、ふと鏡に自分等の姿のうつるのを見て、弟の次郎は姉さんに向ひて、

姉さんは女でありながら私より嫵緻がわるい。

と、申しました。ところが大變です。姉さんは怒つたにも怒つたに

も大怒りです。

姉さんは、すぐにお父さんの許にかけて行つて、

お父さん、次郎さんは男の癖に女らしく嫵緻なんかを誇つて威張つて居ますよ叱つて頂戴な。

此時お父さんは二人の子供をよんで語りますやう、お父さんはお前方の毎日鏡を見ることを望んで居ります。次郎は醜い行をして美しい貌を汚さぬやうに、お雪はうるはしい操を守つて嫵緻の足らぬ所を補ふやうにと教へ訓しました。

一一 鹿の悪友

一匹の牡鹿が病氣になつて牧場の片隅の静な處に寢で居りました、スルト其の友達が、大勢病氣見舞にやつて來ました。そして病氣で寢

でゐる鹿の枕下に置いてある食物を、すつかり食つてしまつたので病氣でゐた鹿は、大そう困つて餓死してしまつたといふ事です。皆さん悪い人を友にしてはいけません。

一一一 風の神様

或時、男の子と女の子と一しよに遊んでゐました。そして男の子は紙鳶を持つて遊んでゐます。女の子は羽子をついてあそんでゐました。すると、二人とも風の神様に御願いたしました。

男の子

紙鳶をあげるから、風のふきまますやうに。

女の子

羽子をつきますから、風のふきませんやうに。



熊 と 人 旅



風の神様は、どうなさるでせう。

やがて、風の神様は、この二人の御願をお聞になつて、

はてな困つたものだ、何ちらもおれの子だがどうしたらよからう。

と、いはれました。

男の子は大そうせがんで、早く風をふかせてくださいとたのみました。

かやうにあまり、男の子が無理にせがむので、神様も愛相がつきて大そうひどい風をふかせになりましたから紙鳶は風のために吹きやられて、電線にかゝつてしまいました。

皆さんもあまり、無理な事を願つてはなりません。

甲乙二人の旅客が、途中で危難に逢つた場合には、必ず互に助け合ふと云ふ約束で一緒に森の中を通りますと、忽ち叢から熊が出て来て、此方へ突進んで來ました。

處が甲は身輕で敏しい質でしたから、すぐに樹の上へ登つてしまいましたが、乙は唯一人では熊を相手に闘うこともならず、其處へ仰向に倒れて、息を殺し、死んだ風をして居ますと、やがて熊がやつて來て、息を嗅ぎ、眞の死骸と思つて、其の儘行き過ぎて了ひました。其の後で甲が樹から降りて來るとニコニコしながら、

君の耳の處へ熊が口を持つて行つたやうであつたが何か言つたのか。

と訊きました。

すると、乙は

左様サ熊は君の事を大そう卑怯ものだと思つて居た、そして、口では體裁の好いことばかり言つて、まさかの場合には、友人を棄て、逃げるやうな男はくれぐれも信用するなと注意してくれた。

と、申しました。

誰でも體の好い約束を信じてはなりません。

一四 牛小屋の鹿

獵人に追はれた一頭の鹿が、逃げ道に迷ひ、只或る農家へ飛び込みますと、丁度牛小屋の戸が開いて居ましたので急いで其處へ隠れました。

すると、傍に繫れた牛が、

何故こんな敵の多い處へ遁げ込んだのです、此家は家族も大勢だから、なか／＼危険です。

と、忠告してくれましたが、鹿は、

マア暫く黙つて見て居て下さい、其中には好い逃場所を考へますから。

と、頼んで居る間に、はや日の暮方になると、牛飼が晩の秣を運込むやら、作男が忙しそうに其處らを通るやら、人の往來が大そう劇しくなつて來ました。然し誰一人鹿に氣の付くものもありませんでしたから鹿は靜に藁の中から頭を擡げ、牛にかばはれた禮を述べてムク／＼起きて出さうになりました。すると牛が、

イヤまだ／＼大丈夫とは行きません、此家には尙一人百人前の眼球を持つた人が居ますので其人に見付つた日には、其こそ生

命が危い。

と言つて密に話をして居ますと、其處へ丁度主人がやつて來て、彼方此方と皿のやうな目で見廻し、

コラ／＼鈍作、此位の仕事にグズ／＼何時迄か／＼つて居るのだ藁をもつと澤山敷いてやれ、其處から此の蜘蛛の巢を、何故拂つておかぬのだ。

コラ／＼もつと秣をやれ、コラ其處じやよ。

と喚き散して居るうち、偶然角が目に入つたので、忽ち大聲で傭男を呼び集め、鹿を撲殺して了つたといふ事です。

一五 獅子の臨終

一匹の獅子が老衰して仕舞つた上病氣でどうする事も出來ず死ぬば

かりになつて居りました處へ、野猪がやつて来て、寝て居る獅子に向つて突撃し、永い事忘れずに居た仇を鋭い牙の一突まで報いて去つた跡へ、又一匹の牡牛が来て、これも何か怨があると思へ、其の角で一突して行きました。驢馬がこれを見て、あれ程大きな獅子が自由にされて居るのは面白、一つ自分もやつてやらうと、走つていつて、獅子の額を蹄で蹴飛ばしました。すると獅子は、苦し氣に、最後の息をホット吐いて、苦しいながらも、勇敢なる野猪や牡牛の輕侮は忍びよいが、お前のやうなものに受くべき筈ならぬ凌辱を受けるのは、實に死に勝つた苦痛である。と、申したそうです。

世のなかには人のおちぶれたときに、その人を侮る人があるやうです。

### 一六 三人の子供

米國に、一人の貧しいやもめ婦がありました、そして三人の男兒がありました。ところがあはれにもズボンが一つしかないので、三人の子供は、之を共同用にして、かはる／＼はいてゐました。そしてお母さんはこの三人の子供をかはる／＼學校に通せてゐました。すると學校の先生は、この三人の子供がかはる／＼學校に来るのを大それた不思議に思つてゐましたが、いづれも同じズボンをはいて來る事に氣がつかしました。そこで先生はその中の一人に向つて

あなたの家ではどうしてみなさんが一しよに學校にこないの

と、問ひました。スルト子供は  
 左様でございます、私の家は貧乏でズボンが一つしかないので  
 三人一しよに學校に來ることが出來ないのでかはるゝ學校に  
 通ふのです。

と答へました。

先生は之を聞いて大そう感心いたしました。

### 一七 デモクレスの劔

昔、ダイオニレスといふ王がありました。不正殘虐な王様です。か  
 ら、暴君の名を得ました。そして誰れも己れを悪んで居ることを知  
 つて居る彼は常に誰か己が命を奪ふ者があるまいかと恐れて居りま

した。

併し王の事として、富貴榮華を極め、金殿玉樓に棲み綺羅錦繡に満つ  
 ると云ふ結構な暮しでした。それで一日彼の友なるデモクレスは王  
 に向ひ、

何と幸福なことよ、人の求むるあらゆる物を恣にして。

と、云ひました。

暴君は

然らば、お前さん一つ私と代つて見たくはないか。

と、云ひました。之を聞いたデモクレスは、

いやとよ王よ、私は只一日丈け王の富と逸樂とを恣にする  
 ことさへ出來れば残りはありません、別に其上を望みはしませ  
 んのです。

と、云ひました。  
そこで暴君は、

ではよろしい、然らば一日代つて見よ。

とて、次の日デモクレスは宮中に導かれ、總ての侍臣は彼を君と扱ふべき旨申し渡されました。斯くてデモクレスは食堂に入り座を占むるや、山海の珍味は其前に置かれ、何一つ快樂を興ふるに缺けたるものはありません。高價な酒やら、美しい花、珍しい薫香、楽しい音楽、加之、身は柔かい椅子に安座して、マ―世界に是程仕合せなことはないと思ふ程でした。

處が、何思はず天井へ目を見上ますと、豈圖らんや、將に彼の頭に接せんとして頭上に動揺して居る者がありました。何でせう。  
是こそ、一條の鳥の毛で懸けられた白刃で、あはや此毛にして

切斷すれば如何でせう、其危きこと一髪にゐるのです。  
之を見たデモクレスの顔は笑顔忽ち去つて土の如く、恐怖戦慄しました。最早彼は食を取るの勇と酒を飲むの勇がありません。又何とて音楽が楽しめませう、彼はひたすら、宮殿を逃げ出さんことを欲しました。

此時暴君は、

どうしたのですか。

と尋ねますと、デモクレスは恐怖の餘り體身が振へて動かせぬ、只だ口を開いて、

あの劔です、あの劔です。

と叫びました。

ダイオニレスは之を聞きて、

そらだ、私はお前さんの頭上に劔があるのを知つて居る、それは何時落ちるかも知れぬ、併しお前さんはなせ恐れるのですか。私は何時も頭上に劔を戴いて居る我命を奪ふものあらんかと恐れて居ります。

と云ひますと、

デモクレスは、

誤りました、歸らせて下さい、私は飛んだ考違ひをして居りましたが、今は富貴権力が外目に見るやうに幸福なものでないことが分かりました。モ一山の中の元の貧乏小屋に歸ります。

と、氣息せきながら答へました。

此後彼は其生涯中少しも王候の榮華を羨み、之に代る様な愚をなしませんでした。

## 一八 一人の獵師

或る獵師が小銃をかついで、山へかりに行きました。すると間もなく一疋の兎が出て來ました。獵師は大そう喜んで、之はよい獲物だと足にまかせて追ひかけました。

その時、またわきの方から一疋の大きな兎が出て來ましたが、獵師は急に心がかはつて、さきに追つかけた兎を追ふ事をやめて、大きな兎を追ひはじめました。

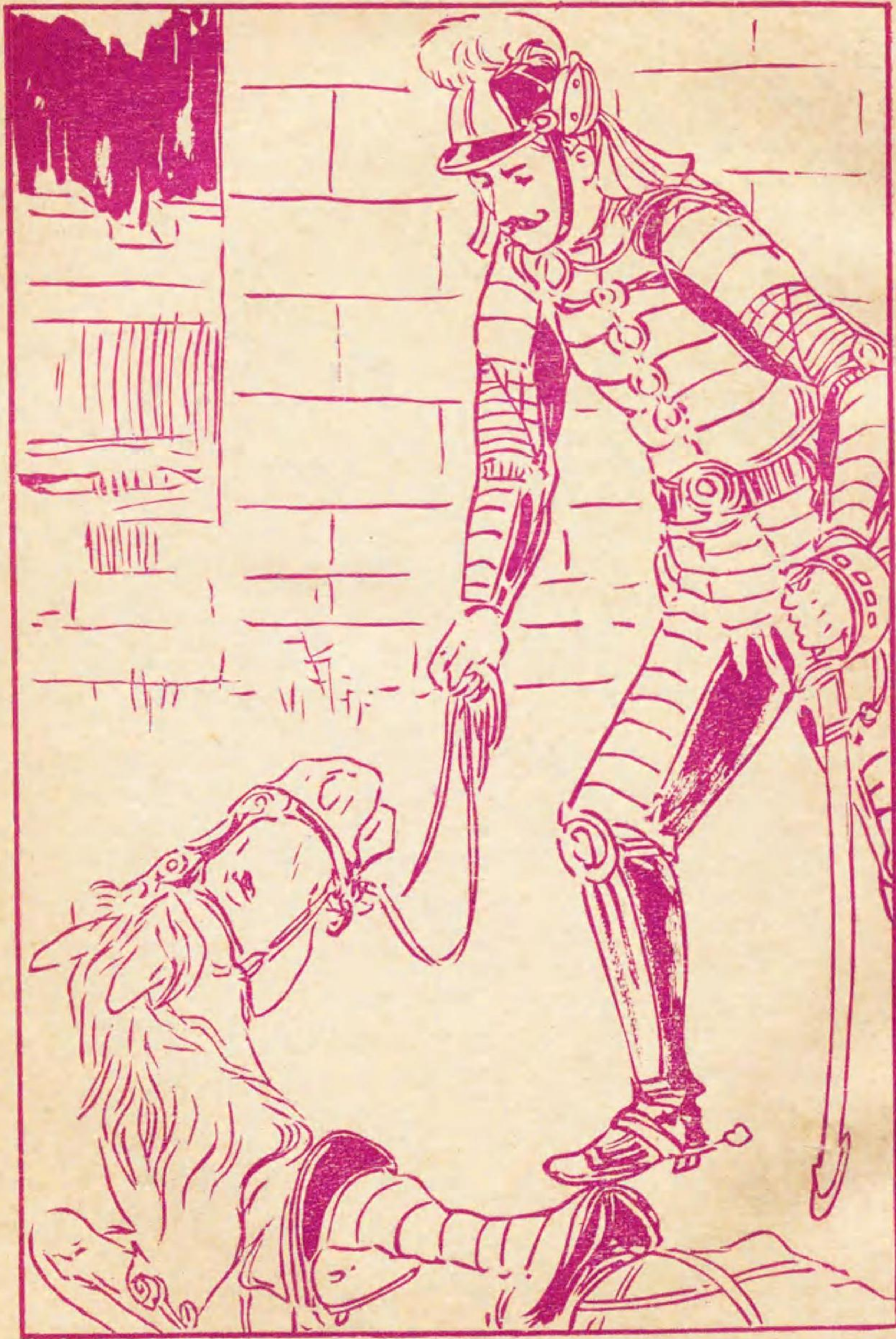
ところが兎が大きくて足が早いものですから、なか／＼に追ひつかれません。そこで再び心がかはつて、この大きな兎を追ひかけることを止めて、又もとの兎を追ひかけましたが、もう遠くへいつてしまつて、どちらの兎も捕ふることができなかつたといふことです。

二兔を追ふものは一兔を得ずといふのは此の事です。

### 一九 騎兵と馬

一人の騎馬兵があつて、戦時中、其の乗つて居る軍馬を非常に勞はつて何につけても大事な奴は此の馬ばかりだと、乾草や麥や、いろく御馳走をいたして居りましたが、やがて軍がすんで仕舞ひますと、急に家へ曳いて往つて糠ばかり食はせる上重い材木を擔はせたり、それはく酷い使い方をいたしました。

然るに一たん無事にすんだ戦争が再び起つて、騎兵は其の所屬の隊へ召集され出陣する事となりましたから、馬には早速軍馬の装をさせ、自らも重い鎧を身にまとひて之に跨り意氣揚々として出掛けやうとすると、軍馬は一二歩も踏出すか出さぬ内に其の重荷に絶へず



馬 と 兵 騎



して倒れて仕舞ひました。  
そして其の主人に向つて

もう貴方は徒歩で戰場へ行く外はありません、貴方は立派な軍馬であつた私を驢馬にも劣つたものとして仕舞つたのですから假令今急に先のやうな逞しい、軍馬にしようとしても駄目で御座いますと申しました。

馬ばかりではありません、人を使ふにも日頃よくして置かぬとイザといふ時に役に立たぬものでございます。

二〇 二人の童子

昔、江戸城を築いた太田道灌が、日頃大そう可愛がつてゐた二人の童子がありました。

或る秋の事でありましたが、一日道灌は、この二人の童子をつれて  
 廣き庭に出ましたところ、秋のことで、木の葉がサラ／＼と落ちて  
 来て、二人の童子のからだにかゝりました。  
 そこで道灌はサツト扇面を開いて一人の童子にかゝつた木の葉をは  
 らひました。すると、ほかの一人の童子は、この様を見て大そうこ  
 れをねたみました。道灌は、この様を見て、すぐに一首の和歌を作  
 つて、

ひとりには塵をも置かじひとりには

荒き風をもあてじと思ふ

と、詠みました。

すると、いまゝで、ねたんでゐた童子はこの和歌を聞いて、自分が  
 悪つた事を氣付き大そう心を改めたといふことです。

## 二二 可憐の猿

昔、支那の吳の國に、一人の男が、一疋の猿を籠に飼つて大そうこ  
 れをかわいがつておりました。

さて、かやうにして十年程も、これを飼つておきましたがだん／＼  
 と考へて見ると、猿は、もと山に棲んでゐたもので、かうして籠の  
 中に飼つておくよりは、自由に山をかけて歩く方が楽しいであらう  
 と思つて、ツイ近き山へつれていつて、これを放つてやりました。  
 すると、やがて、一晚にして猿はもとの飼主の家に歸つて來ました  
 それで、飼主が思ふには、これはあまりに近すぎたので猿が歸つて  
 來たのであらうと思つて、こんどは遠い山へつれて行つて、大きな  
 谷底においてまゐりました。

すると猿は、十年といふ永い間、籠の中に飼はれてゐたものですから、自分で栗や柿を取つて食ふ事を忘れて、とうとう餓ゑてたはれたといふ事でありませう。人もあまり樂をして暮すと、しまいには此の猿のやうになります。

二二二 口の誠

或る處に大そうおしやべりの兒がありました。そして終日、人の噂ばかりをして居ました。或日の事、物識の先生が、これを戒めて、これ、これ、お前、人間の體をよく御覽なさい。人間の體には二つの手と二つの足とがあります。これは、この二つの手で多く仕事をし、またこの二つの足でよく運動をして、壯健になれ

といふのであります。

然るに、口は、たゞ一つしかありません、これは人といふものは、多くむだ口をきいてはいけぬといふ天の誠です。だからあまりおしやべりをしてはなりません。と、云つてこれを戒めたので、そのおしやべりの兒もツイに口を慎むやうになつたといふ事です。

二二三 子供の争

或る秋の夜に、四五人の子供が、月を眺めてゐましたが、しきりに雲が飛んで来て、月が出てはかくれ、かくれてはまた出てをりました。ちやうど月が飛んでゆくやうでございました。すると子供は議論をはじめて、一人が、

雲がはしるのである、月がはしるのではない。  
と、いひましたが、又一人は、

イヤ月がはしるのである、雲がはしるのではない。

と、いつて、しきりに争つてゐました。

やがて、又一人の子供が来て、

みなさん、此の木の下に来てござんなさい。

と、いつて、多くの子供を木の下につれていつて、月を見ました處が、月はある枝の處にゐて動きません、そして雲はさながら羽根でもはゑてゐるやうに飛んで行きました。そこで此の争はすぐに明になつて、

はしるのは雲で、月ははしらない。

と、いふことがわかりました。

## 二四 鼠の相談

或る天井の上に、一晚、鼠の相談がありました、其の中の頭の鼠がいふには、

世には猫といふ、おそろしいものがあるが、どうかして之を妨ぐ、よい工夫はありますまいか。

と、いひ出しました。

すると、一匹の鼠がすゝみ出ていふには、それはよい工夫があります。それは他でもない、猫の首に鈴をつけるのです。さうすると、猫が來るとき何時も鈴の音が聞えてすぐに知れるから、その中に逃げてしまふ何んとよい工夫ではありませんかと述べました。多くの鼠は之を聞いて皆よい工夫であると賛成いたしました。

さて、此度は、  
 誰か猫の首へ鈴をつけて来るか。  
 と云ふ相談になりましたが、かうなると鼠は皆ちやみあがつてたれ  
 一人猫の首へ鈴をつけに行ふといふものはないやうになりました。

二五 狐の大失敗

犬と鶏と口頃から、大そう仲がよいものですから、或る時連立つて  
 旅に出ました。そして夜になつたので、茂つた森の中に泊るやうに  
 しました。鶏は樹の枝に飛上つて、犬は其の樹の幹の洞に入つて眠  
 りました。やがて夜が明けましたので、鶏は何時もの通り大聲を出  
 して幾度も関を作りました。  
 狐は此聲を聞いて、ヤこれは上等の朝飯に有り就いたと鶏の止つて



狐の大失敗

居る樹の枝の下へ来て立ち止り、

只今聞いて居ましたが、實に美しひお聲で御座います。斯様な美しい聲を有つた貴方とは是非御懇意に致したいので参りましたと、丁寧ていねいに申しました。

鶏にはとりは狐きつねの狡猾かうかつな事と知つて居るものですから、少しも信じませんそれは、それでは誠に恐入りますが此の樹の幹の處へお廻りになつて、どうぞ私の門番をお起し下さいませんか、さう致せば門番が戸を開いて御案内致しませう。

と、之も何氣なく申しましたのを信じて、狐は樹の洞近く行きました、すると突然犬が飛び出して之を捕へズタ／＼に喰裂いて仕舞つたそうです。

二六 蘭丸の頓才

昔、織田信長の臣に、森蘭丸といふものがありました。大それた子供に似合はぬ智慧の多い人でございました。

或日の事、信長は蘭丸の智慧を試してみ様と思つて、蘭丸をよんで、こりや蘭丸よ、あの衝立に書いてある、繪の虎を捕へて来いと、申しつけました。

蘭丸はすぐにおほせの通り、委細かしてまつてござる、と云つて起ちました。やがて麻繩を持つて来て、大手を廣げ、

おそれ入りますが、御前そなたより虎を追い出して下さいませ。と、申しました。

信長は、これを聞いて、大それた感心したといふ事でありませ。ナン



助 夢 と 僧 小

トえらい智慧のある人ではございませんか。

## 二七 小僧の夢助

むかし、名高い真宗のお寺がありました。このお寺に、年を  
使はれて居る庭男に夢助といふ大變な寢坊があつて、一旦横になつ  
たが最後、假令兩足を引提んで、他所へひきづつていつたとて、容  
易に眼を覺まさない位でありました。

ある日のこと夢助は、尻を端折つて、はきを手にして、廣い境内  
を掃除して居ましたが、しきりに睡氣がさして來たので、本堂の椽  
の處にはきを枕にして、大雷のやうな鼾をかきつゝ、さも心地好  
さ相に午睡をして居ました。

すると、この寺の小僧で、平生から惡戯所好の一人が、不圖この體



を見て、何か面白い悪戯をして、仲間の小僧達を吃驚させてやらうと、青い頭を右左に傾けながら、昵と腕組をして考へて居たが、左様だ、可い事を思ひついた。

と、いそいで庫裏の方へ駆け行きました。

少時すると件の小僧は、そつと院主の剃刀を持ち出して来て、死人の様に能く寝入つて居る夢助のちよん鬚をころりと剃り落しました。が、ものゝ小半時間も経つと

あゝつ。

と欠伸を續けさまにして、かの夢助は眼を覺ましましたので、小僧はす早く身を隠し、笑聲を忍んで見て居ました。

夢助は、斯くとも知らず、暫く椽側に突立つた儘、四邊を見廻して居たが、可厭に頭が軽くなつて、折柄の風が冷たく泌み渡るので、

何氣なく手を舉げて撫で、見ると、何時の間にか、くりくり坊主になつて居るから

やつ、これは一體何うしたのだらう。

と、頓狂な聲を出して驚いたが、果ては穩かならぬ顔つきをして

あゝ、私はひよつとしたら、既う死んで仕舞つたのじやないか  
でなければ、くりくり坊主にされる譯がないのだから。

と、心配らしく獨言を云つて居る時、小僧達の御經を讀む聲が聞へたので、

これは大變な事になつた、私はいよゝゝ死んだのに相違ないから、何でも早く極樂とやらいふ處へ行かねばならぬ、若しぐすくして居て、地獄の鬼から捕まへられると大變だから。

と一目散に走り出しました。

さて、夢助は、本堂の横手の方へ駆けつけたが、其處には大きな蓮池があつて、紅いのやら、白いのやら、今を盛り盛りに咲き亂れて、そよよ吹く風につれて、何ともいへぬ好い薫が致します。

夢助はこれを眺めて、

かね／＼と院主さまのお話に、極樂といふ所には、奇麗な蓮の花があるそうであるから、何でも此處が極樂に相違ない。早くあの蓮の花の上に載つて仕舞う。

と、只もう夢中になつて、突然跳りかゝつたから堪らない。蓮莖は脆くも折れて、どつと泥水の中へ落ち込みました。

院主を始めお寺の人達は、この物音に吃驚して何事が起つたのかと駆けつけて見ると、かの夢助は坊主頭になつて、蓮池の中に落ち込んで居るので、兎も角もと引き上げて、だんだん仔細を聞いて見ると、

實はかういふ理由でございます。

と、本堂の椽に午睡をして居た事から、覺めて見ると頭を坊主にさされて居たから、自分は死んだものだと思つてこの蓮池を極樂と間違へ、周章で、飛び込んだ事まで、残らず皆に話をしましたので、一同呆れて仕舞ひましたが、斯様な悪戯をしたのは誰だらうと、しきりに大勢の子僧達を取り調べたから、とう／＼隠すことも出来ず、かの悪戯好きの小僧は、スツカリ白狀して仕舞ひました。

この事があつてから、夢助も大そう後悔して、さしもの寢坊の癖をやめて、一生忠實やかに働きましたとサ。

二八 二匹の蛙

二匹の蛙が、永く栖んで居た沼の水が旱魃で涸れましたので、何處

か水のある處を探そうと思つて連れ立つて其處を出ましたが、須臾  
 て満々と水を湛へた深い井戸が見つかりました。一匹の蛙は悦んで  
 此處は冷くて、水も深く栖みよさそうだから早速飛び込もうで  
 はないか。  
 と、言ひますと、他の蛙は、  
 いや、此處で水が涸れようものなら、其れこそ出場がない。  
 と、言つて拒みました。  
 誰でも一時の困難を脱れたために、考もなく事を成すと、後には  
 さつと後悔するものです。

## 二九 慾張老爺

慾兵衛といふ慾張の老爺がありました。そして此の老爺さんは、自

分の所有品を賣拂つて、みんな金に換へ、地に穴を掘つて其れを埋  
 け、毎日其處へ出て行つて、其のお金の顔を見て喜んで居ました  
 或る時一人の盗人があつて、この老爺の様子を見て大それた不思議に  
 思ひ、其の老爺の迹をつけて行つて、其の秘密を見届け、扱老爺の  
 行つた後で、其の金を浚つて逃げて了ひました。  
 すると、例の老爺は、其の明朝、常時の通り往つて見ると、此の始  
 末なので、慾兵衛は、まるで狂氣のやうに騒ぎ出しました。すると  
 近所の人々は何事かと思つて老爺さんの所へいつて見ると、右のや  
 うでしたから、其の譯を聞いて一同笑ひながら、

何を其様に嘆くのです。貴方は初めから金を埋けておいて、必  
 要な時でも、些とも役に立てませんから、ツマリ持たないと同  
 じ事です。其位なら寧ろ金のつもりで、瓦なり石塊なりを地に

埋けて、毎日來ては番をして居た方が遙かに優でしやう。  
と、云ひました。

### 三〇 コルネリアの王

今を去る數百年の昔、或る朗かな夏の朝に葡萄棚の下に向つて、母と其の友が花卉の中に散歩するのを眺めて居つた二人の兄弟がありました。

弟は兄に向ひ、

兄上よ、あの母上の友ほど美しい御方を御覽になつたことがありますか、ほんに女王のやうな方ですな。

と、云ひました。  
之を聞いた兄は、

けれども母上ほど美しくはありませんよ、まことに美しい着物は召しておいでなさるが、お顔にけたかい親切な處がありません。母上こそ女王のやうな方ですよ。

此時母は尋ねました。

それは今日吾々皆が此の御飯を食べるのだが、あの私のお友がいつも二人の聞いてゐるやうな玉の箱を見せるのですよ。

と、云ふて聞かせました。

かくて二人は母上の友達を見て、其のきらめく指輪や鎖に母を忍んで恥かしく思ひましたが、やがて、食事も終りかけた頃、下男の家から箱を持つて來ましたが、婦人は之を聞きますと、之に満ちた寶玉は燦然光を發して眩い計りでした。

二人の子供は、只だ驚き眺めて居りましたが、弟はつぶやいて、

母上にも、こんな美しい物をお持ち遊ばせ。  
と、子供心に羨しさに云ひましたが、箱は直ちに片附けられ、  
友なる婦人はコルネリアに向ひ、

あなた、ほんとうに珠玉をお持ちになつて居りませんか、聞き  
ますと、御不自由なされて御出だと云ひますが。

と、問ひました。

此言葉に、コルネリアは傍なる二人の子供を引き寄せて、いえく  
何でそんなことを、決して貧しくはありません。是が私の寶で又  
珠です。此の二人はあなたの珠よりも貴うございます、と、けなげ  
に答へました。二人の子供は、此の自信ある愛ある言葉を服膺して  
果せるかな、羅馬の大偉人となりましたが、終生此園中の光景を忘  
れませんでした。此二人こそ羅馬の史上に花たる兩ケトトで、又此



鴉の智慧

話<sup>はなし</sup>コルネリアの寶<sup>たから</sup>として行末永<sup>ゆくすへなが</sup>く世界<sup>せかい</sup>の人々<sup>ひとら</sup>に噂<sup>くわいきう</sup>する話<sup>はなし</sup>でございます。

三三 鴉<sup>からす</sup>の智慧<sup>ちゐ</sup>

或<sup>ある</sup>時<sup>とき</sup>、一羽<sup>は</sup>の鴉<sup>からす</sup>が咽喉<sup>のど</sup>が渴<sup>か</sup>いて死<sup>し</sup>にそらになつたので、大<sup>たい</sup>そら水<sup>みづ</sup>に困<sup>こま</sup>つてゐました。ふと水瓶<sup>みづびん</sup>を見<sup>み</sup>つけたものですから、大<sup>たい</sup>そら喜<sup>よろこ</sup>んで、すぐ<sup>すぐ</sup>に其<sup>その</sup>の水<sup>みづ</sup>を飲<sup>の</sup>まうといたしますと、アマリ水<sup>みづ</sup>が少<sup>すく</sup>ないもので、喙<sup>くちばし</sup>が届<sup>と</sup>かず、しきりに、もどかしがつて、果<sup>はて</sup>は水瓶<sup>みづびん</sup>をひつくりかへして、一雫<sup>しゆく</sup>でも水<sup>みづ</sup>に有<sup>あ</sup>りつこうといたしましたが、それも自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の力<sup>ちから</sup>には及<sup>およ</sup>びませんでした。

すると、やがて鴉<sup>からす</sup>は好<sup>よ</sup>い思案<sup>しあん</sup>が浮<sup>う</sup>び出<sup>で</sup>て、砂利<sup>じり</sup>を喙<sup>くちばし</sup>で掬<sup>すく</sup>うては瓶<sup>かめ</sup>の中<sup>なか</sup>に落<sup>お</sup>しましたので、だんだん水<sup>みづ</sup>嵩<sup>かさ</sup>が増<sup>ま</sup>して來<sup>き</sup>て、思<sup>おも</sup>ふやうに水<sup>みづ</sup>を

飲むことができませんでした。  
力に及ばぬ事でも智慧があれば、成し遂げ得るといふ事は此事でせう。

旅順閉塞隊

日露戦争の時、旅順港を閉塞せなければどうしても大勝利を得る事は出来ないのです。そして此の旅順港を閉塞せんとして決死隊を募りいよいよ此の勇ましき企てを執行したは所謂決死閉塞隊でした。初め、此の閉塞隊を組織する時分に普ねく其の志募者を募りましたが、二千餘の志願者があつたのです。それで其中から七十七人を撰り出して、海軍中佐有馬良橘といふ人が其隊長になりました。東郷大將は大そう喜んである時中佐の肩を叩いて、

君と乃公とはお互に無鐵砲同志だが、とうだ、十年ばかり前にかへつて一と花咲かせないか。

と申されました。

有馬中佐は勇んで、

難有い、是非貴下と、生るも死ぬも一所にさせて下さい。

と、答へました。

すると東郷大將は、

有馬君死んで呉れ、君が隊長になつて行けば乃公も安心だ。死ぬまでもやり通して行く。

と申しますと、中佐は、

死にます、屹度死にます。其の代りに旅順口の港口は立派に閉いで了ひます。

と、請合ひました。

決死隊七十七人を選んだ東郷大將は報國丸、武州丸、武陽丸、天津丸、仁川丸の五隻の汽船に石塊を山のやうに積んで、これに七十七人を分け乗せまして、叢雲、夕霧、不知火、陽炎などの驅逐艦を出して、いよ／＼船出をさせました。

東郷大將は有馬中佐の一隊の影の見えなくなるまで見送つて、あゝ國の爲に死に行くのだ、實に潔よい、出来得べくんば一人でも二人でも無事で歸つて来て呉るればよいと心の内に祈りました。

やがて水雷艇、隼、鶴、真鶴、千鳥、燕の五隻は櫻井少佐が之を率ひて決死隊を乗せた。五隻の汽船を護つて行つたのです。その時は二月二十四日午前三時三十分で霧は遙かの砲臺から一面に立てこめて、潮風冴えて物凄い時でした。

此の時敵の方では日本艦隊の爲に始終ひどい目に逢はされて居るものですから、探海燈を以つて海の四方八方を照して少しでも形が見えたらば、すぐに大砲を打ち出さうと待ち構へてゐたものですから此の決死隊七十七人が五隻の汽船に乗組んで港口を目標けて來たのを黄金山老鐵山の砲臺から雨のやうに打ち出しました。打出す彈丸は物凄い音を立て、頭の上を飛んで行くのです。そして浪の中で破烈しては、潮を吹ます。

五隻の中の天津丸は、探海燈の光りが邪魔に成つて、充分に見當をつけることが出來ず、針路を少し取り違へて老鐵山の東の岸の方まで行つて、とう／＼礁の上に乗上げて了ひました。

武陽丸は夫から少し外の處で、自分から火を發して首尾よく沈ませました。



報國丸は港口の燈臺下で、  
 武州丸は其の東の方で、何れも自分から船を破壊して沈ませました  
 仁川丸は饅頭山下で礁に乗り上げました。  
 五隻の汽船に乗つた勇士は、いづれも手を拍つて喜んで

萬歳々々

日本帝國萬歳

日本海軍萬歳

と叫びました。

アの勇ましき廣瀬中佐は此の決死隊に加はつて、遂に名譽ある戦死  
 を遂げられました。

何んと勇ましいではございませんか。

老人の訓言

ある老人に幾人かの子供がありました。其子供は不幸にして仲が  
 悪く、互に喧嘩ばかりして居ますので、老人は心配して、如何かし  
 て仲を善くしてやらうと、いろ／＼の手段を用ゐて見ましたが、少  
 しも效がありません。

そこで老人は到頭一策を案じ、或る時子供を残らず自分の前へ呼び  
 集めて、一束の木の枝を持ち出させ、一人づゝ有らん限りの力を出  
 して、其れを折つて見よと、言ひ付けました。子供たちは各々やつ  
 て見ましたが、なか／＼誰の力にも叶ひません。そこで老人は、更  
 に其の束を解かせ、一人に一本づゝ願けて、折らして見ますと、何  
 の造作もなく折れました。

さて老人は子供に向ひ、

結合の力は先づ斯様なものだ、お前達も、一致して團結すれば

誰にも侵されることもあるまいが、少しでも互に心が離れて結合を破り、喧嘩をするやうな事があれば、忽ち敵の餌食となつて一緒に爲遂げた成功も水の泡となつて了るのであらう。と、諭しました。

### 三四 獸の王様

或時、獸の大會がありました。其の席で猿が上手に、踊をおどつて見せたので、外の獸が皆感心して、猿を獸の王様にいたしました。狐は之を見て、妬しくてたまりません。どうかして猿をしくじらせてやりたいと思つてゐる矢先、獵夫がおいしそな肉をぬなにかけて置いたのを見付けて、そしらぬ顔で猿の王様を其處まで誘ひ出しました。王様を此處までお連れ申しましたのは外でもございませ

實はおいしい肉のある處を見付けましたが、自分で食つて仕舞ては相濟まぬ、王様の御領地のものだから、王様に差上げるのが忠義といふものだと思ひまして、お連れ申しました次第で御座います。其内といふものは即ち此でございませす。少しも早く御食り下さいと係蹄にかけてある肉を指しました。猿の王様は意地が汚いから、何の思慮もなく肉へ飛び付きますと、忽ち係蹄にかゝつて仕舞ひました。此時猿王は、大それたおこつて狐の自分を欺いて係蹄にかかるなどはかんがへないで、どうして獸の王になつてゐる事が出来るものかと申しました。皆さん、あまり慾ばつてはなりません。

### 三五

### 慾張小供

一人の子供が、栗の入つた口の小さい壺へ手を入れて、つかめる丈  
 け澤山栗をつかんでサア手を引出さうとすると、壺の口が狭いから  
 拳がつかへて、どうしても出ません。それといつて栗を放すのはい  
 やだし、放さなければ手がぬけないし、忽ちワット泣き出して仕舞  
 ひました。すると傍に居た人が、そんなに澤山つかむから抜けない  
 のだ、半分で満足すれば、スグに抜けるだらうと申しました。

### 三六 勇壯なる行爲

デルハイの町を流れる河岸に沿ふて、逞しき一人の印度人は熱せる  
 顔色鋭くも、

彼は殺さねばならぬ、ペーバーは殺さねばならぬ。

と獨言きながら歩んで居りました。ペーバーとは誰の事でせう。是

れヒマラヤの雪を踏んで南下して印度を征服し帝位に即いた韃靼の  
 勇者です。そして斯く吠いた武士こそ征服の怨を懐く印度の一勇士  
 で白刃を懐中してデルハイに向ひ不倶戴天の仇を求めて怨みを一刃  
 の下に晴さんと志した者です。

彼が町に入ると街路は人の山で、往來は織るが如くです、彼は遇ふ  
 丈高き人毎に鋭き眼を注いで、ペーバーを求め、どうかして怨の仇  
 を酬いんものと目を八方に配つて居ました、是れペーバー帝は屢々  
 異装して民情を探らんものと市中を徘徊せらるゝからです。

然るに此時俄かに市街は恐ろしい大騒動と變じ、行人は狼藉爲す所  
 を知らずといふ様になりました。是れ何かのはづみに象が狂ひ出し  
 ましたので、血眼で其の鼻を振ひながら行き當り次第、町を荒して  
 居るのです。それで、大人さへ寄り付き得ず、婦女子は恐れ叫びま

した。

この混雑の眞最中に一人の小供が狭い路に倒れましたが、生憎それが象の道に當つて居るのです。それこそ危機一髪將に象の足の下に粉砕せらるゝ處でした。併し誰とて助けませう。身分賤しい此小供のこととて却つて手をつけるさい耻とする位ですから、皆たゞ觀望するのみでした。

然るに不意に走り寄つて此小供を起し、あはや、象の一撃を免れて飛び歸つた勇者がありました。此人こそ容貌偉大、温顔花の如く、常人の相でありません。其の子供を下ろした時、帽が落ちて眞顔が見えたので、勇士は直ちにペーパー即ち日頃付け狙ふ帝である事を知りました。

勇士は此時、我と我身を忘れて帝の前に進み出で、跪いて懐中せる

白刃を取り出し、帝にさゝげ出し。

陛下願くば、之を取つて陛下の命を奪はんとせし逆臣を誅せられよ、臣は今日陛下を殺さんとして來ましたが、生を與ふるは之を奪ふに増して尊きことを感じた。

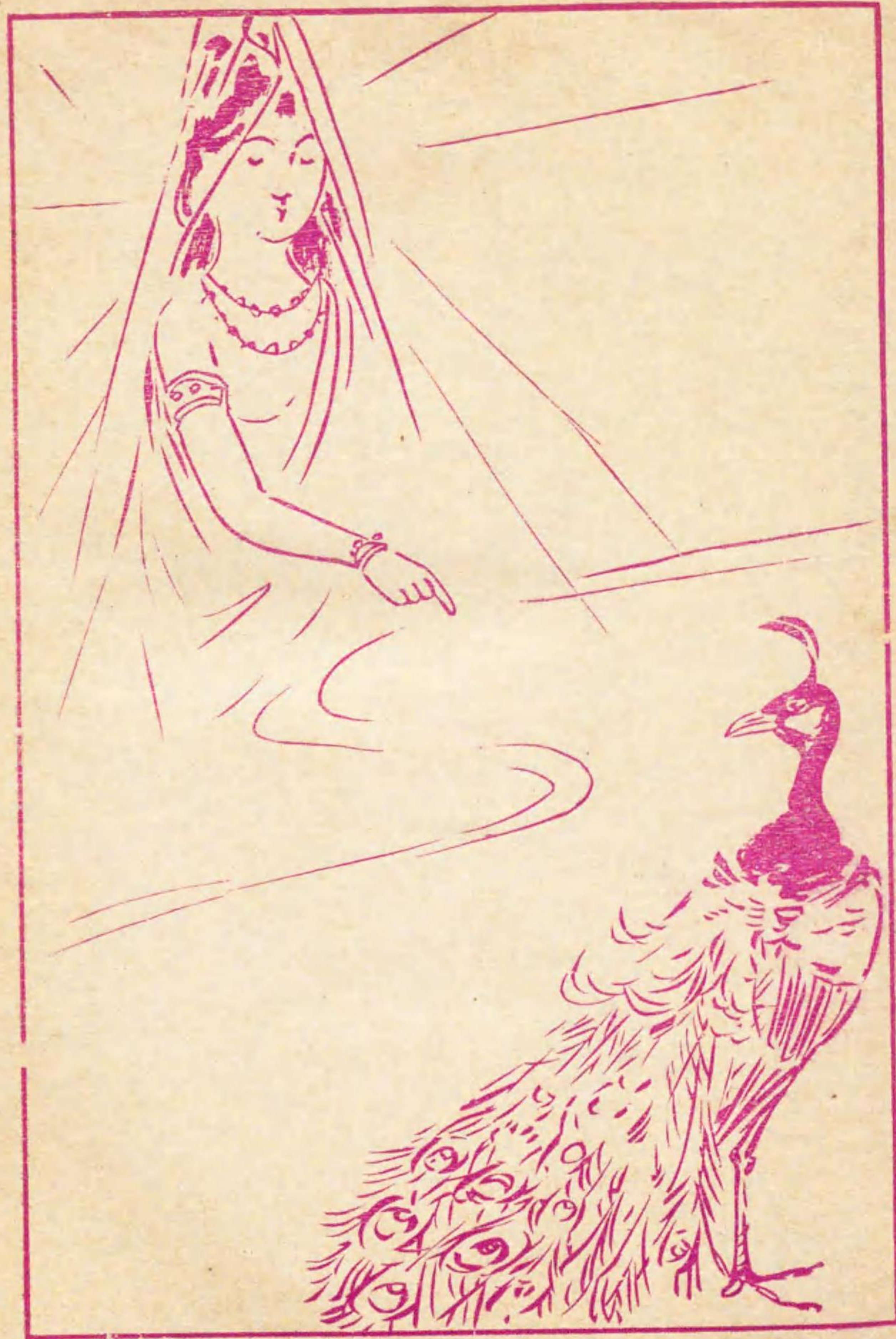
と、申しあげました。

帝は之を聞き玉ひ、驚きの顔を笑に變へさせ玉ひて其手を伸ばし、勇士を引き起して、

宜なるかな言や。生を與ふるは、之を奪ふより高尚な事である今朕は汝が提げ出した命を受けたが、其の命は爾後朕の爲めに送らねばならぬ。朕は汝を今日より宮中の侍兵とするぞ。

と、仰せになりました。

此の恩言に接した勇士は、嬉し涙にむせびましたが、彼はペーパー



平不の雀孔

の命を奉じて其の勇兵となり、數度の戦を経て尙ほ年を全ふし、帝の慈惠によつて命を救はれた話を後世に傳へました。

三七

笛吹漁夫

音樂の上手な漁夫、笛と網をもつて海の岸へ來て、突出た岩の上に立つて、いろ／＼な面白い笛の曲を吹きました。それはかうしたらば、魚が笛の音に浮かされて下に廣げてある網の中へ躍り込むかうだらうと考へたからです。ところが、いくら吹いても鱈一匹網の中へ躍り込んで來ないので、漁夫は笛を投げ出し、網をざんぶと海の中へ打込みました。そして網を引上げて見ましたら、魚が澤山はいつて、其の魚がピン／＼躍つてゐるのを見て、漁夫は申しました。

人が一生懸命に笛を吹いてやつてる内は躍りもしないで、此方が笛をやめてから、面白さうに躍るとは、ほんとうに片意地な奴等だ。

と、申しました。

この魚ばかりではありません。他人はナカ／＼自分の思ふ通りになるものではありません。

三八 孔雀の不平

孔雀がある時、神に向ひ、鶯が如何にも好い聲で謳うので、人は皆譽めるが、自分は聲が悪くて誠につまりません。一寸でも口を開いて、何か謳おうとすると、人が笑出して仕様がありませんから、どうか好い聲を授けて下さいと嘆願いたしました。

すると神様は孔雀を慰めて、

お前の奇麗な姿は、なか／＼鶯などの及ぶ所ではない頸の園には碧玉の飾、胸には金紫の光、双の翼にも美しい彩色があつて鳥仲間では、一番の縹致ではないか。

と、懇に諭しましたが、孔雀はナカ／＼承知せず、

否、私は日頃欲しいと思ふ好い聲がなくては、姿が幾許奇麗でも、少しも嬉しいとは思ひません。

と、駄々をこねました。

すると神様も少しおこつて、

其れはお前の心得違といふものだ、鳥には皆々天から授かつた種々の形や性質を持ちて居ればよい。

聲の悪いお前には奇麗な羽があり、奇麗な羽のない鶯には愛ら

しい聲があり、鷺には威力、鸚鵡には人真似の藝、鳩には優しい性質と、皆、特別の天分がある。

お前が獨り愚痴をこぼす理由がない。

と、諭したといふことです。

### 三九 洋燈の宏言

洋燈が油を澤山吸つてポツポツと盛んに燃えながら、太陽だつてもこれ位明くはあるまいと自慢をして居ると、急に風が吹き起つて、

忽ち消えて仕舞ひました。主人は再び之を點火して

自慢せずに、以來は黙つてトポツて居るが、太陽はさて置

き星でさへ、火を點け直すやうな事はないぞ。

と、戒めました。

## 四〇

## 春日局の忠義

春日局の本名は、おふくと申して、お父様を齋藤内藏之助と申しました、妙齡になつて小早川秀秋の家老職をつとめてゐる稲葉土佐守へ嫁入り能く夫に仕へて、間もなく二人の子を生みました、不圖した事から、小早川家を浪人して、京都で手習の師匠を爲て暮すことになりました。

所が不幸にも、土佐守は病氣にかゝつて次第に重くなり、とうとう死んで了ひました。

おふくは身も世もあらぬほどに、嘆きました、仕方がありませんから、斷念めて、庄次郎、萬之助といふ二人の息子の未だ八歳と十一歳になる兒を、劍術の師匠である會田新右衛門といふ親切な人に

預け、自分は江戸にゐる岩見傳助といふ、以前臣下であつた人の方へ參ることになりました。

おふくは巡禮姿に身を扮し、心細くも京都を後に、東海道を江戸へと志して參りました。幸にも道中無事で、只今の新橋邊まで来て、目的す神田旅籠町は何の邊であらうかと、しばらく石に腰掛け、疲れた足を休めてゐました。

すると、何處から出ましたものか、四五人の悪漢が飛び出し、物をも云はず、おふくを引倒し何處へか連れて行つてしまひました。

おふくは、幼少な時から、十分に劍術を教へ込まれてゐるものですから、それを見るより、

無禮者、何を致す。

と、云ひながら、右に左に體を動かして寄り付く者をば取ては投げ



いたしましたものだから、流石の悪漢も、雲を霞と逃げて了ひまし  
た。

すると最前から、五六人の立派な武士を連れて見てゐた老人があり  
まして、何か臣下に云はれると、臣下はすぐにおふくの傍へ来て、

彼處にゐられるは徳川家康公である。最前から貴女の働きを見

て感心されたのですが名は何と云ふか。

と、尋ねられました。

此時分、家康は將軍職を秀忠公に譲られて、自分は御隠居の身とな  
り、今日しも鷹狩に行かれたお歸り途であつたのです。

おふくは頭を下げて、

自分は神田旅籠町の岩見傳助を尋ねて行く處である。

と委しく其の素情までもお話し申しました。これを聞かれ

た家康公は、

豫て聞き及んだ京都の稻葉おふくといふのは貴女であつたか、

夫に貞操なるばかりでなく、彼れだけの劍術もつかえるとは、

實に感心な女だ。

と、早速臣下に言付けて、おふくを神田の岩見の家へ送らせ、改め

て三代將軍家光となられる幼名竹千代君といふ方の乳人に召し抱へ

られ、茲に初めて春日局といふ名になり、御奉公をすることになり

ました。

おふくが奉公に上りました時は竹千代君の弟に國松君と云ふお方が

あつて竹千代君が四歳で國松君が二歳でした。そして情ない事には

御臺所は國松君が可愛くて兎もすると、兄の竹千代君を疎まれるの

です。春日局も之れを大そう心配して丹精こらして、お育て申し上

げ、竹千代君の行末をお祈りしてゐました。併し其の甲斐もなく、日に増し國松君の勢がよくなつて参りました。

これではならぬと思つた局は、伊勢へお参りをするからといつてお暇を頂き人知れず、家康が隠居をしてゐる駿河國の府中に参り事を別けて家康にお願ひいたしました。

其後家康は鷹狩に行くといつて府中を出で俄に江戸の城へお参りになつて、二代將軍秀忠公を初め多くの臣下に向はれ、

皆の者も能く將軍を補け、徳川家の爲めに盡してくれるのは有り難い事だ、私も最早年を取つて何時死ぬかも知れないが、三代將軍は竹千代を以て繼がせるのであるから、其の積で能く忠義を盡して呉れなければならぬ、殊に春日局は大役を勤めて呉れる段、家康も満足に思ふ。

と、ありましたので、誰一人否と云ふ事が出来なくなりました。これも皆春日局が忠義からであります。其後竹千代君が將軍となられ、家光といふ名になられた時、春日局の忠義を思ひ、二人の兒を召出して大名に取り立て、年寄りました局は小石川の春日町に隠居をなし七十二歳の時に此世を去りました。寔に婦人にめづらしき賢い人ではございませんか。

四一 兎の主張

獸の集會席上に於て兎が演説をして、總ての獸類は皆同等たるべきものであるといふ事を論じました時、獅子は、お前の言ふ處も悪くはないが、お前達は吾々の有つて居るやうな爪も齒も無い、さうすると、どうも同等にはならないやうだ

と、申したそうでございます。

四二 狐の卑怯

狐が鐵欄の内に閉籠められた獅子を見て、其の側へ行き散々に辱しめました。其の時獅子は、

お前のやうなものに辱しめらるゝのも身に降りかゝつた災難ゆえだ。

と、申しました。災難といふ事は、如何なる人でも免れる事は出来ません。人の災難に逢つたのを氣の毒と思はず、其の弱身に附込むといふ事は最も憎むべき事です。

四三 正直な羊飼

ある處に、一匹の獅子がありました。今日は好い天氣なので、朝から、餌を漁るために、森の中を駆け歩いて捜してゐました。

する中に、何うした拍子か、脚の裏に刺を踏みぬいて、自分では何うしても除ることが出来ませんから、痛さに苦んだすゑ、或る羊飼のゐる所に参りました。

獅子の姿を見た羊飼は、大そう驚いて、すぐに羊を呼び集め、自分も逃げだそうといはしました。

これを見た獅子は聲をかけて、  
若し、もし羊飼さん、私は決してあなた方様を喰ひ殺しはいたしません。お頼みがあつて來たのですから、何うかお助け下さいませ。

と、いはれて羊飼は立ちどまり、

獅子さん、お前はそんな事を言つて、油断をさせておいて、私

たちを食ふのじやありませんかね。

と云ふと、獅子は徐ろる傍へ来て、

否え、決して嘘ではありません。眞個に貴方にお願があるので

す。

と、云はれました。羊飼はやつと安心して、

一體何ういふ御用なのです。私で出来る事なら、何でもして上げませう。

と、申しました。獅子は喜んで尾を動かして、

實は、彼の森の中を駈けてゐると、何うした機にか、脚の裏を踏みぬきましたので、それが痛うて歩行けません。何うか助けると思ふて、其の刺を抜いて下さいませんか。

と、云ひますと、深切な羊飼は、

それはお困りでせう。さあ抜いて上げますから、脚をお出し下

さう。

と、云ひながら、獅子の脚を自分の膝の上に載せ、能く調べて見ると、如何にも大きな刺が立つてゐましたので、それをやつと抜き取つてやりました。

獅子は大そう喜んで、

まことに有り難うございます。お蔭で痛みも止り、無事に歸ることが出来ます。サヨナラ有難う。

と、厚くお禮を申して、其儘山の奥へ歸つて行きました。そして獅

子は此のお禮として羊を一匹羊飼の所にやりました。

すると同じ羊飼の仲間の一人が正直な羊飼の家へ来て、

近頃、私の羊が一匹行方が知れなくなつたのですが、お前さんの所に行つてゐるのがそれではないか一寸見せて貰いたい。

と申しました。彼の男は羊を一目見て、  
あゝこれだ、確かに私の羊に異ひない。氣の毒だが今連れて歸りませう。

と、申しました。正直者は、

お前さんのに異ひなければ、私は何う斯う云ふことはありませぬ。

と、いつて此男に渡してやりました。

其翌日になると、昨日連れて行つた羊が何時の間にか又歸つてゐるのです。正直な羊飼は大そう怪んでゐると、又羊飼がやつて来て、又逃げ出したが、若しや此方へは来てはゐるまいか。

と、尋ねて、又連れて行きました。

すると其の翌日も又其の翌日も同じやうに羊が歸つて居るのです。其の度に慾張男に渡しましたが餘り毎日なので、其の男は腹を立て裁判所へ訴へ出ました。裁判官も捨ては置けぬとすぐに正直者を呼び出して調べましたが、慾張男が旨ひことを申立てますので、結局正直者は無實の罪に落ち、生きながら獅子に食はされることになりました。

愈々今日は獅子の檻の中へ、正直者を入れると云ふので、裁判官も他の人も多勢見物して居ますと、獅子は羊飼の顔を見て俄かに優しくなり、脚を膝の上に載せて、いかにも馴れ／＼しくなるのです。一同は不思議に思ひ、裁判官から尋ねますと、此の獅子は、以前に羊飼に助けられた獅子であることが判りましたので、裁判官は、

其のやうに親切者であることが判つてみると、羊を盗み取るやうな事はあるまい其の羊はお前が云ふ通りに、獅子がお禮によこしたのであらう。

と、いふことになり、正直者は、無罪になつて御褒美を頂き、彼の慾張の男は却つて其の場で其の獅子に食はして了はれたといふことです。

四四 道樂息子

或る處に金遣ひの荒ひ若者がありました。そして若者は祖父傳來の資産をスツカリ遣ひ棄て、仕舞ひ、残つたものは唯一枚の立派な羽織ばかりでございました。

然るに此の若者は來る季節よりも恐しくやつて來て、池の畔を掠め

飛びつゝ氣樂に嘯つて居た燕を見てアもう春になつたのだと思ひましたから町へ往つて其の羽織を賣りました。

それから四五日経つと、寒さが冴返つて來て、霜が降るといふ始末此時若物は、不幸なる燕が寒氣のために凍えて、息もたえゝくに地上にビク／＼して居るのを見て、

アどうしたお前は、實に可憫さうな奴だ。然しお前も春が來ない内からやつて來たばかりに自分で凍死の不幸に遭ふ計りか、此方まで酷い目に逢はせたぞ。

と、申しました。

四五 漁夫の喜憂

漁夫が或る日網を投つて、引揚げやうとすると、大それな目方です

これは何でも澤山魚が入つたのに相違ないと思つて、皆喜びました  
 が、イザ網を岸へ引上げて見ると、魚は小さなものが二三匹、網には  
 砂や石ばかり一杯入つて居ましたので、何れも皆非常に呆れて、眼  
 と眼を見合して居るばかりでしたが、これは獲物の少なかつた失望  
 と云ふよりは喜びの大き過ぎた爲です。  
 其時一人の年寄つた漁夫は、

イヤ誰でも鬱々事はないぞ。喜びと悲みとは、常に裏と表のや  
 うなものだ、今大喜びをやつた後へ悲みの來るのは當然の事だ  
 と、申ました。  
 皆サン如何な事があつても、喜び過ぎたり、悲しみ過ぎたりしては  
 なりませせん。

## 四六

## 貞女の話

昔、大阪に高橋作左衛門といふ人がございました。

此の人の家の庭に、大きな柿の樹がございましたが、その柿が熟す  
 る時分には、何時も近所の者共がやつて來て、みだりにこれを取り  
 ますから、作左衛門はこれを防いで、毎夜見廻をしてるくく寝な  
 い事が多うございました。

ある日の事作左衛門は、役所から家へ歸つて見ますと、例の柿の樹  
 が根から伐り倒されて居ましたから、大そう驚いて誰が此の樹に悪  
 戯をしたのであらう、どうして此の柿の樹が倒されてゐるのであら  
 うと、すぐに其の家内の者に尋ねますと、其妻はすゝみ出て、

それは妾が伐らせました。

と申し出ましたから、夫の作左衛門は一そう之を怪んで其譯を尋ね  
 ますと、妻は、

この柿の木のあるために、お心を勞し玉ふ事、實につまらぬ事  
 でございます。モシ此の柿の木がなかつたならば、必ず本業を  
 はげみて、家を起されませうと思つて伐つたのでございます。  
 と、申しました。さすがの作左衛門も之を聞いて大そう感心せられ  
 たといふ事でございます。  
 誰でも人の妻たるものは、此の人のやうに夫をして事を成し遂げし  
 むると云ふ事が肝心でございます。

#### 四七 十人の王子

昔、獨逸の或地方に十人の子を持つて居る王様が居りました。所が  
 その子供等は皆男の子ばかりでした。  
 ある日王様は女王に向つて、

モシ此次に産まれる子が女の子であれば、十人の男の子を皆殺  
 してその女の子に此王國を譲る。

と、云はれました。

それから王様は棺を十個こしらへて、秘密室に入れて置きました。  
 そうして其の秘密室の鍵を女王に預けて、其事を誰にもいはぬ様に  
 堅く言付けて置きました。

所が女王は非常に心配して、其日は一日座つたまゝで泣いて居りま  
 した。

すると、いつも女王の側にばかり遊んで居りました一番幼い王子の  
 ハイリツヒは母の泣いてるのを見て不思議に思つて、

お母様何が悲いんで、そんなに泣きなさんです。  
 と、尋ねました。



女王は秘密室の扉を開けるや、其處に列んで居る十個の棺を指示して、

お前等十人の兄弟の爲に、お父様の命令によつて作られたので若しお母様が女の子を産んだならば、お前等は皆殺されて此の棺に入れられるのです。

と、云ひながら、聲を立て、泣きました。

幼いハインリツヒは、お母様を慰むる様に、

お母様お泣きなさるな、それじや吾々は今宵の中に此城を逃げませう。

と云ひました。

女王は暫く思案した後、

お前等は今宵の中に森へ行つて、順番に高い樹に登つて、お城

を見張りなさい。もし母様が男の子を産んだ時は、城の屋根に白旗を立てるから、其時は、お前等は急いで城へ御歸りなさい。若し又不幸にも女の子を産んだ時は、赤旗を立てるから、其時はすぐと何所へでも人の眼に止まらぬ所へ逃げてしまいなさい。お母様はお前等の爲に、寒い時節には暖くなるやうに暑い時節には涼しくなるやうに、神様に祈ります。

と云つて女王は一室に十人の王子を集めて別れを告げました。

其處で十人の王子は、母に云はれた通りに森へ行つて、順番に高い樹に登つて、お城の方を見張つて居ました。ちようど十日目は、ハインリツヒの番で、相變らず高い樹に登つて、お城の方を見張つて居りました。

するとお城の屋根に旗が翻りましたが、然し其の旗は彼等が待ちに

待つたる白旗でなく彼等にとつて最も不幸であつた赤旗でした。彼等は赤旗を見て、大へんに腹を立て、僅か一人の女の子の爲に十人の男の子を殺す様な、そんな不公平極る王様の所置に對してあくまでも抵抗し、之からさき女の子は見付け次第に用捨なく、斬殺す事に定めて、尙、奥深く森へ逃げ込みました。餘程歩くと不意に薄暗い所へ出ました。其處に一つのみすぼらしい小屋がありました。十人の王子等は、この小屋を彼等の住家と定めて、ハイソリツヒは未だ年もいかないし、身體も弱いもんだから、留守番に残して、其他の九人の王子等は、手に手に弓箭を持つて、獵に出掛けました。此森で、彼等は兎だの、鹿だの、山鳩だの、雉だの、其他食べる事の出来るいろんな鳥類を射て來ました。

斯様にして十人の王子等は、かれこれ十年間此小屋に住んで居りました。

話變つて、お城の方では、女王の産み落した玉の様な女の子は、スツカリ御成人遊ばして立派なお姫様となりました。

所が此のお姫様は稀なる美人で、おまけに額に金の黒子が一つありました。

ある夏の日、お城に、大きな土用乾がありました。其時お姫様は母の女王と一所に、衣類を乾かして居りました。するとお姫様は十枚の子供の着るシャツを見て、誰のかしらんと不思議に思つたので其内の一枚を手を取つて、

お母様、此シャツはお父様のにしては餘り小さ過ぎますが、一體誰のシャツなんです。

と、女王の前に差出して尋ねました。

女王は十人の王子と別れてから、唯の一日も彼等の事を思はぬ日とはなく、心中嘆いて居りましたのに、今又、彼等の遺物とも云ふべき十枚のシャツを見て、もう胸が塞り、言葉よりも涙が先に出ました。

女王は落ち来る涙を手巾に押えて、

嬢よ、此等のシャツはお前の十人の兄弟のシャツです。

と、いひました。お姫様は驚いて、

そんな事は今まで聞いた事がありませんが、何所に私の兄弟が十人居ります。

と、尋ねました。

女王は涙ながらに、

ア、彼等は今頃、何所に何うして居るか知らぬが、恐らくは、食物もなく、着物もなく、さぞ困つて居る事でせう。

と、いつて、秘密室へお姫様をつれて行つて、十個の棺を示して、泣き／＼今までの事を残らずお姫様に語りました。

するとお姫様は、

お母様、決して御心配なさいませぬ。之から私は十人の兄弟を捜して参ります。

といつて、一枚のシャツを携へてお城を出發いたしました。

お姫様は偶然にも十人の王子等が隠れて居る森を尋ねて行きました。そして日の暮方、ハインリツヒが、留守番をして居りました小屋へ着きました。

ハインリツヒはお姫様の美しい奥ゆかしい容貌と、額の金の黒子と

に驚いて、

貴嬢は斯んな所へ何所から、お出になりました。また之から何處へ行くんです。

と、いと慇懃に尋ねました。

するとお姫様は、

私はある王様の王女でありますが、只今十人の兄弟を捜しに参りました。

と、云ひながら持つて参つた十枚のシヤツをハインリツヒに示しました。

ハインリツヒは、現在自分の妹が今思がけなくも、目前に現はれたので、嬉しさの餘り、

僕はハインリツヒでお前の一番若い兄弟です。

と叫びました。

お姫様は、自分の捜す兄弟が意外に早く見付かつたので、嬉しくてハインリツヒに飛びつきました。

すると、ハインリツヒは、

妹よ！今計らずも、お前と遇つて、之れ程嬉しい事はないが

此所に一つ非常に悲しい事がある。といふのは、もと吾等は女の子の爲に、王國を捨て、斯んな所に彷徨うて居るのですから女の子を見つげ次第誰れ彼れの用捨なく斬殺す事に定めてあるのです。

と、語りました。

お姫様は之を聞いて、

皆様が無事にお城へ歸る事が出来るなら私は喜んで死にます。

と云ひました。

イヤ僕は決してお前を殺す様な事はせぬ、とにかく少し考もあれば、窮屈でも、此小さい鹽の下に隠れて居なさい、

と、ハインリツヒはお姫様の手を取つて鹽の下に隠しました。

間もなく九人の王子等は、獵から歸つて來たハインリツヒは彼等に向つて、

サテ皆様、此ハインリツヒが皆様に一つの御願があります、

と、改まつて申しました。彼等は一同に、

改まつて願といふのは何です、

と尋ねました。

イヤ外でもないが、今此所で遇う女だけは殺さないといふ契をしてもらいたい、

と、ハインリツヒが云ひました。彼等は變に思ひましたが、

ヨシ聞いてやらう、

といつた、ハインリツヒは鹽の側にツカ〜と進み寄つて、

皆様此所に吾等の妹が居ります、

といひながら鹽を取りました。

すると額に金の黒子のある奥ゆかしい容貌のお姫様が現れて、

オ、兄様お懐しうございます、

と、彼等の手を握りました。彼等も亦大へんに喜びました。

其後お姫様はハインリツヒと一所に小屋に残つて九人の王子等が獵に出かけた後で、小屋を奇麗に掃除をしたり、食事の支度などをして、彼等の歸るのを待つて居りました。

かやうに十人の王子等はお姫様と一しよに楽しく暮して居りました

或日の事、彼等は一つの食卓をとりまいて、お姫様が心をこめて料理した、結構な御馳走を喰べて居りました、ちようど其時小屋のまわりの小さい花園に十輪の奇麗な白い百合の花が今を盛りに見事に咲いて居りました。

お姫様は王子等に一枝づゝ此花を差上げやうとして、花園に降りて皆摘んでしまいました。

すると忽ち十人の王子等は、皆野鳥となつて森へ飛んで行きました同時に、小屋も花園も無くなつてしまひました。

お姫様は嘆驚してまわりを見ると、薄暗い森の中に、たつた自分一人残つて居りました。

所へ一人の老婆さんが現はれて、

コレ女王、なせお前はあの百合の花を取つたのです、あの百合

の花は今野鳥になつて飛んで行つた十人の王子等の精でした、

と、いつたので、お姫様は驚いて、

ア、老婆さん、何うしたらよいのでせう、何うか元の王子にする方法はありますか、

と、お尋ねいたしました。スルト、老婆は、

イヤある、たつた一ツの方法があります、が、お前に話しても

到底出来ないといふのは、七年の間哑者とならねばならぬ、モ

シ其間にちよつとでも話したり、笑つたりすると、十人の王子

等は、元の姿に返る所か忽ち死んでしまいます、

といつて老婆さんは見えなくなりました。

お姫様はどうしても彼等を元の姿にしなきゃならんと覺悟して、夫から高い樹の上に登つて其所で絶えず、糸を紡いで、物も云はず、

の花は今野鳥になつて飛んで行つた十人の王子等の精でした、

と、いつたので、お姫様は驚いて、

ア、老婆さん、何うしたらよいのでせう、何うか元の王子にする方法はありますか、

と、お尋ねいたしました。スルト、老婆は、

イヤある、たつた一ツの方法があります、が、お前に話しても

到底出来ないといふのは、七年の間哑者とならねばならぬ、モ

シ其間にちよつとでも話したり、笑つたりすると、十人の王子

等は、元の姿に返る所か忽ち死んでしまいます、

といつて老婆さんは見えなくなりました。

お姫様はどうしても彼等を元の姿にしなきゃならんと覺悟して、夫から高い樹の上に登つて其所で絶えず、糸を紡いで、物も云はず、

また笑ひもせず、まるで啞者の様にして居りました。  
 所へちようど、ある一人の若い王様が、大きな獵犬を連れて其森へ  
 獸獵に來ました。獵犬は香を嗅いでお姫様の登つて居りました樹の  
 下に來て、上を向いて烈しく吠えました。  
 王様は不思議に思つて、其處へ來て見ると額に金の黒子のあるお姫  
 様が樹の上に居りました。  
 王様はお姫様を見ると、すぐ其の樹に攀じ登つて安全に下へ助け降  
 し、自分の馬に乗せて、お城へ連れて歸りました。  
 夫から王様はお姫様の承諾を得て、立派な結婚式を擧げて、御夫婦  
 になりました。

所が花嫁のお姫様は物も云はず、又笑もしないで殆んど五六年間は  
 至つて幸福に暮りましたが此處に意地の悪い繼母のために、かれこ  
 れと悪口を云はれて遂に王様の御機嫌を害ね、いよ／＼無實の罪に  
 よつて火焙の死刑に處せらるゝ事となりました。可哀そうにお姫様  
 は山のやうに積み上げられた薪の眞中に十字架に括し上げられて、  
 怨めしうに天を瞰んで居りました。  
 間もなく薪に火の點くや、折しも北風劇しく火はボウ／＼と燃へ上  
 り、恐ろしい焔の赤い舌が今しもお姫様を殺そうと致しました。  
 すると空中に可恐しい雷鳴起り、十羽の野鳥が十字架を見かけて飛  
 んで來ましたが、忽ち十人の王子となつて火中に飛び込み、無事に  
 お姫様を助け出しました。

此時がちやうど七ヶ年の満願の日でありました。  
 お姫様は此所で始めて物を云ふ事が出來たので、王様に今までの事  
 を詳しく語つて、お詫をいたしました。すると王様は疑を晴らし且

つお姫様の健氣な心に感じて、また更めて立派な結婚式を挙げられ  
十人の王子等はお姫様に永別を告げて無事に又父の城へ歸りました

四八 龜と鷲

龜が日南にヌク／＼と甲を干しながら、自分も飛びたいから、鷲に  
飛び方を教へてくれと頼みました。誰一人相手にしてくれませ  
でした。其時一羽の鷲が其の近くを歩いて居て、龜が飛べないと言  
つて悲んでゐるのを聞いて、其の側に寄り、  
オイそんなに飛びたけりや、高い處まで連れていつて、空中を  
飛ばせてあげてもいゝが全體何を其の禮にくれるのだ、  
と、申しました。  
龜は、

飛ばせて下さるなら、此の寶を皆差上げます、

と、言ひました。

鷲はヨシ夫れでは飛方を教えてやらうと言つて、龜を兩足で引摺み  
高く／＼雲へといく程飛び上つて、其處で俄に龜を放しましたから  
堪りません。険しい山の岩の上へ落ちて、其の甲は粉微塵に碎けて  
死んで仕舞ひました。

四九 楠正行

四條駿神社は、楠正行を祭つた社です、正行は正成の子で、父と共に  
官軍のために非常にはたらかしました。賊軍があまり、おほせいで  
あつたために、遂に河内の四條駿といふ處で討死しました。正行  
は其時年が二十二歳でした。



五〇 北條時宗

北條時宗は、幼き時から學問が好きで劍術が巧手でした。

丁度十一歳の時でした、宗尊將軍が極樂寺で小笠掛と云つて、馬

に乗つて走りながら、遠くにある的を射ることを演せられました。

其時分鎌倉には、多勢の武士が居り、今日こそは自分の業を將軍の

御覽に入れてお褒めに預らうと、互に敗けず劣らず一生懸命に射た

のです。將軍はこれを御覽になつて、

誰か一層巧手な者は居ないか、と、仰せられます。其時お父様の時頼公が、丁度お供を爲てゐた時

宗をよんで、

汝一矢射て見よ、

と、いひつけられましたから、時宗は承知を爲て馬に乗り弓矢を持

つて立ち出でましたが、少しも焦るやうなことはなく、よく的を測

つて馬を乗り出した的の真中に見事に中りましたから、見てゐる人は

思はず聲をあげて褒めました。

かやうに時宗は幼き時からナカ／＼賢いお方でありましたから、朝

廷から相摸の守に任せられ執權職に就かれました。

其の頃、現今の支那國は元といつて、忽必烈が國を治めて居ました

そして潘文虎といふのを總大將とし、十五萬人ばかりの兵士を軍艦

に乗せ、日本國を攻めにやりました。それで時宗は直に九州の大名

大友氏や、龍造寺、島津、河野などに命令を下して敵を防ぐ準備を

させました。其時の天皇后宇多天皇様や、龜山上皇様は此上もなく

御心配遊ばされ、何うか無事に敵を破ることが出来るやうに神様に

お祈りをなさいました。時宗は陛下の御心を安んじ奉らうと、鎌倉に時宗が居ります以上は、屹度敵を攻め破りますから、何うか御心を安めて下さいませすやうに、と、奏上げました。

忽必烈は、いよいよ弘安四年七月澤山の軍艦を率ゐ、大將潘文虎の指揮にしたがつて、筑前國、博多の沖へ攻めよせました。

敵の船は随分大きな船でしたが、我が船は随分小さな船でしたけれども、少しも恐れず、すぐに敵の船に漕ぎよせて、斬り入らうとすると、激しい石、火矢の爲に打ちなやまされ、何うしても近寄ることが出来ません。それで、仕方がなく多々羅濱邊に陣を布いて、上陸て来たならばと、待つゐると、或る日敵はいよいよ千代の松原の方から上陸つて来たのです。勇氣に満ちた我兵は散々に之を打ち敗

つて皆攻め散らしてしまひました。

此時京都では、後宇多天皇様は、大そう御心配遊ばされて、自ら石清水八幡宮に御参拜になつて、

何うか、朕が身に代へても、蒙古勢をば退治して、我國が無事に在るやうに、

と、お祈りになりました。

すると、九州の方では、七月の晦日から何となく天候が怪くなつて其日の暮方になると、俄に空は墨を流したやうに黒くなり、家も飛び、樹も吹き折れるやうな大風が吹いて來ました。

海は大風雨につれて山のやうな瀟は白沫を吹きながら湧き立つて來たのです。そして荒い凄い大濤は敵の船を散々に揺ります。そして船と船と衝突して見てゐる中に沈没するのです。

此の有様を見て我軍は、これこそ神が我々を助け玉ふ暴風雨である  
 と、河野通有を先頭として、荒れ狂ふ濤をも少しも恐れず、小船を  
 飛して敵の船へと漕ぎ寄せ檣を倒して敵の船に掛け、片ッ端から斬  
 ては海へ投げ込み、又斬ては海へ抛り込んで思ふまゝに斬り捨てた  
 のです。

翌日になると、此やうに荒れた暴風雨も何時しかやんで、常から濤の  
 荒い玄海灘も静になつて、昨日まで盛んに威勢を張つて居た蒙古の  
 軍艦は、あはれ一艘の蔭もなく、皆海の底の藻屑となつて了つたの  
 で、十餘萬の軍勢の死骸は、海も埋るばかりに浮ひて居るのです。  
 そして敵は十餘萬の兵士のうち、生擒になつた三人の他は皆死んで  
 しまつたのです。

その後時宗は、弘安四年四月四日僅に三十四歳で卒たのであります

五一 金鷄勳章

神武天皇の御征伐の時、始は賊が大そう強うございました、何處  
 からか一羽の金鷄が飛んで来て、天皇の御弓に止まりました。そし  
 てそのかゝかく金の光を見て、賊どもは目をまはして、皆倒れてし  
 まひましたから、天皇の御軍が勝となりました、その金鷄をかたど  
 つて金鷄勳章は作られたものです。

五二 驢馬の無分別

或る時驢馬が蟋蟀の美しい聲をして啼いて居るのを聞いて、ア、美  
 しい聲だ、何を食べたらあんな好い聲が出るだらうと、蟋蟀の側  
 へ往つて、

モシ〜お前さんの聲は誠によい聲です、平生何を食べてそんな  
な好い聲が出ます、  
と、尋ねました。  
すると蟋蟀は、  
別に何も食べません、唯だ露を吸つて居るばかりです、

と、答へました、  
驢馬は自分もどうか、露ばかり吸つて蟋蟀のやうな聲を出して見  
いと思つて、其日から草の露ばかりを吸つて居りましたから美しい  
聲どころか、驢馬はやせて骨ばかりになつて死にました。

五三 蚊の自慢

昔、ある處に蚊が一匹居りました、そして、

己は虫の中では一番えらいものだらう、虫達の獸などが大それ  
怖がる人間を刺して、而して其の血を吸ふのだから、己位えら

いものはない、

と、常に自慢をして居りました。

すると或時の事、向ふから一疋の獅子が來ましたから、之にも自慢  
を言つて見やうと、直様とんで行つて獅子の身體にとまり、

獅子さん〜、お前は獸の中で一番えらいのか、  
と、聞きますから、獅子は自慢さうに、

其は言ふまでもない事だ、獸の中では私ほどえらいものはない  
其證據には私が一度吼えさへすれば、どんな強い獸でも、みん  
な怖がつて震へ上つて了ふ、それにどんな獸と喧嘩をしても一  
度も負けた事がない、

と、申しますので、蚊は、  
 左うか、私も虫の中では一番えらいものだ第一人間をさへ困らすものだもの、  
 と、いひますと、獅子は笑ひだして、  
 お前のやうな小さいものが、よくそんな自慢が言へるね、  
 と、相手になりません、すると蚊は大そう怒つて、  
 身體が小さいからといつて、屹度弱いと限つたものでない、  
 と、ぶん／＼言つてゐました。獅子はなほ／＼其を馬鹿にして、  
 其でもお前はあんまり小さすぎるよ、私の爪の先ほどもないではないか、  
 と、やはり笑つてゐました、乃て蚊はいよ／＼腹を立て、  
 夫ならお前と喧嘩をして見やうではないか左うしたら、お前が

強いか、私が強いかい、すぐに分るではないか、  
 と、言ひました。獅子は  
 いゝとも其ぢやア喧嘩をしやう、併しお前は逆も私に勝つ事は出来はしない、  
 と、言ひますと、蚊は口惜しく、  
 まア論より證據といふ事があるから、さあ其では之から喧嘩だ  
 と、口から針を出しましたのを見て獅子は、  
 そんな針を出しても、私の身體には毛が生へてゐるから、逆も刺すことは出来やしない、  
 と、言つて居ります中、蚊は、  
 刺す處は此處にある、  
 と、言ひながら、すぐ獅子の耳の穴へ飛び込みまして、一生懸命に

刺し出しました、  
 之には少し獅子も驚きまして、

そんな卑怯な事をする奴があるものか、

と、言ひましたけれども、蚊はそんな事には少しも構ひません、針のつゝく限り刺して刺しぬきますゆゑ獅子は痒くて堪りませんから

これはどうも堪らぬ、

と、其處ら中を轉げ廻つて、一生懸命に耳を搔きしたから、耳からは血が流れて、流石の獅子も如何する事も出来ません。

其中にはあまり暴れまはりましたから、獅子もとうとう勞れて了つて、其處へ倒れて了ひました。

乃で蚊は、

如何だ獅子さん、お前は私にかなはないだらう、お前よりは私

の方がよほど強いではないか、  
 と、大そうに又自慢を言ひまして、鼻たかくと、

勝つたくとぶんと、

と歌を唄ひ乍ら飛んで行きました。

蚊は獅子に勝つたものですから嬉しくて堪りません、其故其處ら中を飛び歩いて居ます中、とうとう蜘蛛の巣にかつて、どうしても逃げる事が出来なくなり、一心にもがいて居りますと、其處へ蜘蛛が下つて來ましたから、哀れな聲を出して、

蜘蛛さん、どうか勘忍して下さいまし、私は決して悪事は致しません、

と、言ひましたから、蜘蛛は、

馬鹿な事を云へ。お前は悪い事をしない事があるものか、人間

だの獸だのを刺して血を吸ふではないか、まだ其上に虫の中に  
は私のやうなものゝあるのを知らないで、虫の中では一番えら  
いなど自慢をしてゐるさうだが、私は丁度お腹がすいてゐる處  
だから、お前を食べて了ふのだぞ、  
と、言ひながら、とうとう蚊を殘らず食べて了ひましたとさ、誰で  
も自慢をするとみんな斯うです。

#### 五四 小供と蛙

子供等が、池の畔に澤山蛙が集つてゐるのを見付けて、石で夫れを餘  
程殺しました時、一匹の蛙が水から頭を出して、  
坊ちゃん、お前達には慰みにもなるだらうが、おれ達は、それ  
が爲に命を亡くするのだから止めて下さい、

と、叫びましたと。

こんな遊をしてはなりません。

#### 五五 頓智の小判

明智光秀が未だ世に出ませんで困つて居る時でありました。何うか  
して尾張國、清洲の城へ行き、織田信長といふ豪い人にお目にかゝ  
つて、自分の志を物語り家來となつて、身を立て、名を擧げたい  
ものと毎日のやうに、思つて居ましたが、尾張の國まで行く道中の  
お金がありません。そこで色々考へましたが、別に能い智恵も出ま  
せんので、仕方がないから、自分の衣物や道具を賣り拂つて、其お  
金を小遣にして思ふ所へ行ふと決心して、古道具屋を呼び寄せ、在  
るとあらゆる貧乏世帯の品物を不殘賣つてしまひました。

やがて道具屋は、お金を光秀に拂ふと思つて、財布の中から、一枚の黄金を取り出して旦那様、此のお金は、本物の小判でせうか、其れとも偽物で御座いませうかと、光秀に見て貰ひました。すると光秀は其の小判を一目、見るより火のやうな顔をして大そう怒り、古道具屋を叱りつけて、

貴様は斯んな偽物を知つて居ながら使つて居るとは不届な奴だ早速お上へ申上げて死罪にしてやるぞ、

と、大聲を上げて怒鳴りましたから、古道具屋は縮むやうに恐れまして、すぐに其の小判を表の溝の中へ捨て、一目散に逃げて行きました。

光秀は此の様子を見て大に喜び、早速其の小判を拾つて其れを路金にして尾張の國へ参り、信長公に逢つて、其の臣下になりましたが

之から段々出世して天下に名を擧げるやうになりました。何んと面白い思ひつきではございませんか。

五六 雀の仇討

一羽の雀が、卵を三つ産んで、大切に巢の中に、納つて置きました。或る日の事、親雀は朝早く起きて、餌摘みに出かけました、澤山の食物を得た、親雀は、急いで歸つて見ると、大事の大事の卵が、何者にか取られて仕舞つて居ました。

其夜は徹夜、泣きの涙で過しました、翌朝になると、東の空に、太陽が顔を出して、煌々、耀いて居ります。

そこで、卵を盗まれた、親雀は

「あゝ可愛相な事をした、けれども、盗まれた卵は、今更、泣いて



も悔んでも歸らぬ。いつそ今から精出して働こう」  
と、やうやく、氣を取り直して、又働き始めました。  
其中に又も、お腹が段々膨れて一月ばかり経つて四個の卵を産み落  
しました。

「今度こそは、盗まれぬやうに、嚴重に格納つて置かなければなら  
ぬ」

と、巢の奥に秘ひ込んで、毎日毎夜、それを温めて居りました。

すると一日、綺麗な雛雀が生れました、親雀の喜びは一通りや二通  
りではありませぬ、夜も碌々眠らず、食ふものも喰はず、只管、雛  
を育てる事に心を砕いて居ました。

扱、雛の發育は迅速ものです、一週経ち、十日暮す間に、足が起ち  
翼が動くやうになり一月も経つと、親雀の後に連れて遊べるやうに

なりました。

匍へば立て、起てば歩めの親心は、下等動物の雀でも變りはありません、  
せん、親雀は餘念もなく愛しがり、

「翼が利けるやうになつて、母ちゃんも、眞實に嬉しいよ」

と莞爾々すると、雛雀は、あどけない顔して

「母ちゃん、何處へか連れて行つてお呉れよ、遊び度いよ」

と強請む、母雀は少しも厭な顔をせず、早速に、屋根の上に連れ出  
して遊ばせてをりました。

母雀は朝早く起きて、餌探しに出かけようと巢から出て見ると、空  
には一面の雨雲が漲ぎつて、今にも降り出しそらな空模様ですから

「母ちゃんが居ない留守には、決して外に出てはいけませんよ。こ  
んな日には、屹度、悪い奴が来て掠はれるからね、い、かい、決し

て外に出るんぢやありませんよ」  
 とくれぐれも注意して、出掛けました。  
 母雀が出た後で、雛雀四羽は、巢の中で、平和しく遊んで居りました。暫くすると、遊び倦きたと見えて、一番幼いのが  
 「外で遊ぼうではないか」  
 と云ひ出した、大きなのは、母雀の注意を記憶して居りますから、  
 「恐ろしいものが来るよ、母ちゃんもそう云つたぢやないか、こんな日には屹度、悪いやつが来て掠つて行くつて」  
 と云ひましたけれども、仲々聞きませぬ、遂々、幼いのは外に出てしまいましたが、こうなると他の雛雀も、巢の中に凝として居れませぬ、續いて巢を飛び出て、鬼ごっこ、戦争ごっこをして遊んで居りました。

すると、何處からともなく、一羽の大鷲が現はれ、泣き叫ぶ、四羽の雛雀を、掴んで空高く、舞上りました。  
 扱、母雀は、田や畑の中で、餌を漁つて居りましたが、どうしても子供の事が、氣になつて、暫くも餌を漁る心地がしません、そこでまだ餌も充分溜らぬ中に歸りました、歸つて見ると、雛雀が一羽も居ない、さあ何處へ行つたらうかと、狂氣の如く、探しましたけれども、行方が分りませぬ。  
 母雀は、もう勇氣も元氣もなくなり、ぐつたり巢の中に泣き倒れて、さんぐ泣きました、前には卵を盗まれ、此度は雛雀を掠はれたので、どうかして、其敵を見付けて、仇討したいと、健氣にも、我巢を後に、旅の空に出ました。  
 野越へ山越へ森を過ぎて廣々とした濱邊に出ました。此處で勞れた

翼を休めて居りますと一羽の鳶が来て

「お前は雛を尋ねて居るのではないか」

と訊きますから

「さよう、私は雛雀を四羽掠はれたのです、それで探して居るのでございませぬ」

と涙ながらに物語ると、鳶は

「今、私が一羽の大鷲と會つた、而して雀の子らしいものを掴んで居た、もしかそれではあるまいか、今から急いで行けば追付ける」と云ひますから、母雀は飛立つ思

「そ、それは何處の方へ行きましたか」

「東の方へ行きました」

「どうも、有り難うございませぬ」

と母雀は、一生懸命、力の限り根限り、大鷲の後を逐かけ、一つの森の中に這入ると、大木の梢に大鷲が止つて居ります、母雀は恐ろしさも打忘れ

「我子の敵、覺悟しろ」

と飛び付いた。

「何をほざくか、このちよこざいめ、貴様も共々、腹の肥料にして呉れるぞ」

と眼玉を煌々光らせて、雀と立合ひました、鷲は鳥の中でも、王と云はれる程の猛鳥でございませぬから、どうしても雀は叶ひませぬ。

「エ、残念」

と雀は必死の勇氣を絞つて戦ひます、大鷲は悠然と構へてビクともしませぬ。

母雀は、

「もー是れ迄ぞ」

と電光石火の如く敏捷く、大鷲の手元に飛び込んで、油断をして居た大鷲の咽喉へグザと咬み付きました、流石の猛鳥も此の痛手には堪へ兼ね、遂々藻掻き死をしました。

五七

鼠の大將

鼬と鼠と互に絶へず争闘して血を流す事も少くはありませんでした、何時でも鼬の勝利にばかり歸しました。そこで鼠は之は然るべき大將がないのと訓練が無いために敗北するのだと考へましたから種族中最も名譽あり最も力あり、戦に臨んで能く軍隊を整理し得べき才能あるものを撰び、鼬に對して開戦の布告をしました。

新に撰ばれた大將の鼠は、先づ部下に大將を識別せしむるやうに藁で立派な鉢巻をして、威儀堂々と乗り出しました。そして愈々戦争となるかならぬ内に鼠軍は、忽ち大敗北して一生懸命吾れ勝ちに孔の中へ逃げ込みました。然るに大將になつた鼠は頭の飾鉢巻をしたために孔の中に逃げ込む事が出来ず皆鼬につかまつて喰はれて仕舞ひました。

五八

象の目方

昔、支那三國の世に吳の國の孫權といふ人が大きな象を、魏の國の曹操といふ人におくりました。曹操は、魏の霸王といふえらひ、いさほひの王さまでありましたがその國は寒い處で、象などはおりませんでした。それでさすがの曹

操も大そうめづらしがりかたはらの近臣をかへりみて、  
 この象は、たいそう大きなものであるが、何の位目方があるで  
 せう。どうしたら、この象の目方が知れるでせう。  
 と、尋ねました。

近臣は、何れもそんな大きな象などを、はかる權衡などもございま  
 せんから、大そう困つていろ／＼考へたけれども方法がございませ  
 ん。

すると曹操の子に、七八ッなる曹冲といふ子供があつて父の膝にだ  
 かつてゐましたが、あどけなき口を開いていふには

象の目方をはかるのは、かくべつむづかしいことはない。それ  
 はまづ象を船に乗せると、船がいくらか水の中へ深くはいりま  
 す。そこで船の水際にするしをつけておいて、象を船から出す

のです。そうすると、また船が浮いてくるのです。そこで米俵  
 のやうなものを船に積み込んで、水際の處にするしをつけてお  
 いた處まで船が沈んだら、こん度は米俵をつむのをやめるので  
 す。

そして一々其の米俵を權衡にかけて、これをはかり、さうして  
 又これを算盤でよせると、その米俵の全體の目方が、象の目方  
 と同じでありますから、したがつて象の目方を知ることが出来  
 ます。

と、いひました。

近臣のものは、之を聞いて

なるほど、それでは、大象の目方も知れるであらう  
 と、いつて大そう感心したといふことです。

五九 熊の博愛

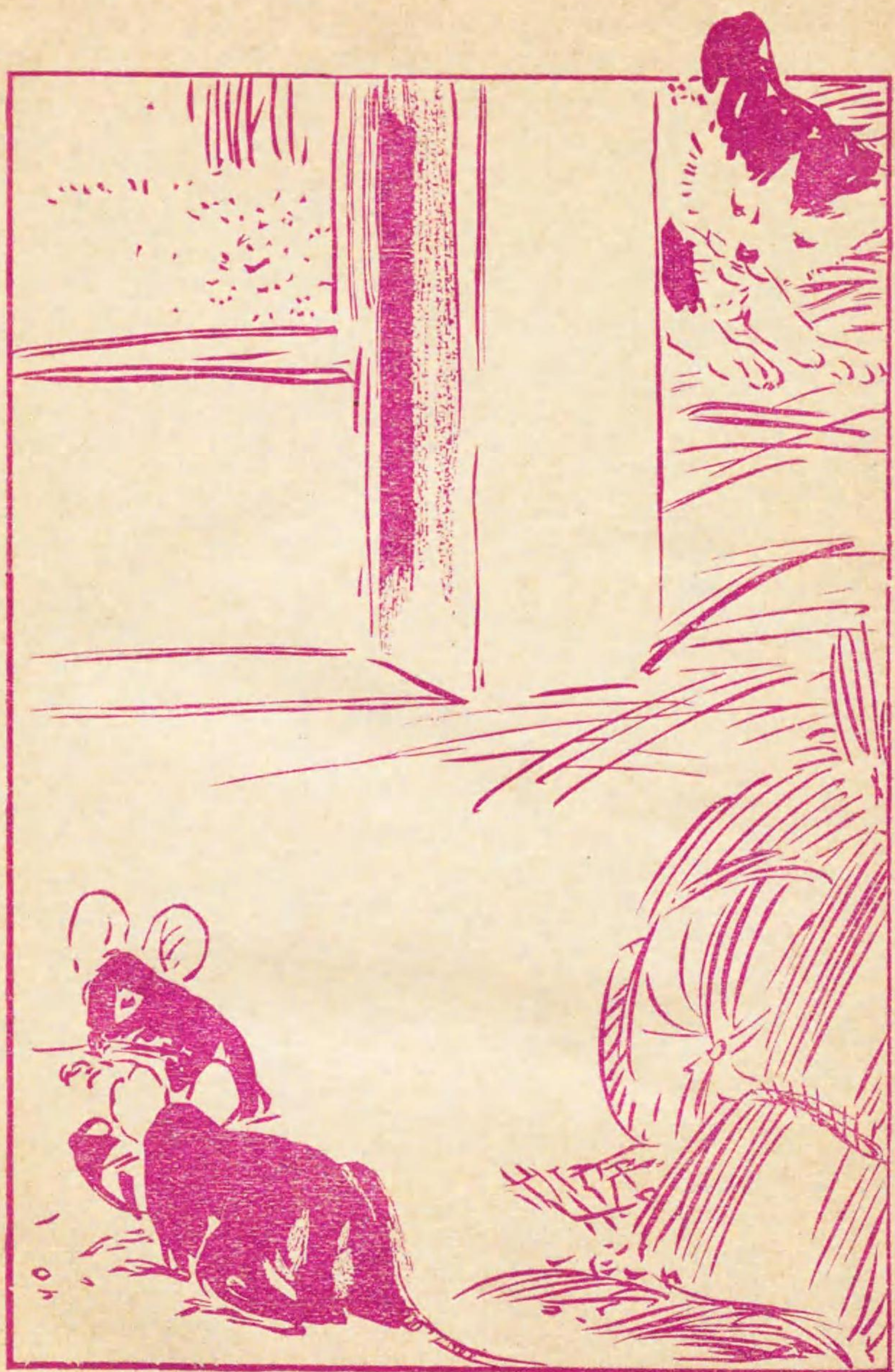
熊が狐に向つて

動物も多い中に、人間に對して最も柔しい、即ち人間の死んだ  
軀へは決して手をも觸れないといふのは吾々の博愛といふもの  
だ。

と、自慢をしました時、狐は冷笑して、

いつそ君、人間の死んだ骸を食つて生てるのを食はぬやうにし  
たら、尙其の方が博愛主義に適つてやしないかねと申しました  
と、云ふ事です。

六〇 家鼠の自慢



家鼠の自慢

家鼠が或るとき思ひ立つて山鼠の處へ遊びに行きますと、山鼠の家  
 は、丁度樅の木の下にあつて、掃除もなか／＼行き届いて居りま  
 した。山鼠は、ソレ御客様といふので、草の根やら木の芽やら、有  
 たけの御馳走をしましたが、誰でも御馳走になる時は、嫌いな物で  
 も旨そらに食べるのが人情ですから、家鼠も折角の御馳走に悪い顔  
 も出来ず、嬉しそらに食べてゐましたが何分にも不味うて咽喉へは  
 通りません。それで常時の半分も食べずに、ヤツト其場を退り、翌  
 日山鼠を自分の家で御馳走する約束をして歸りました。  
 家鼠は、始終穀倉に栖んで居るのですから、食物もなか／＼贅澤で  
 す。ですから山鼠がまゐりますと、早速玉蜀黍や小麦、麩の片な  
 どを持出して、盛んに饗應いたしました。山鼠は今迄見も知らぬ御  
 馳走を並べたので、唯もうたまげて、連りに感心して居ましたが、

こんな美事な品々は、一體何處からお取寄せになりましたか、  
と、尋ねて見たのです。

すると家鼠は爲たり顔で、是等の品は、皆夫れど澤山に倉や臺所に貯へてあるので忍び込んで取つて來るのです。と言巧みに話して聞かせ、尙其上に、お互に山などに住んで居るなら、家のうちに住んで居る方が、適かに幸だと云ふことをも話してゐますと、丁度其時ガサ／＼と藁を踏んで來る足音が聞えたのです。サアこれを聞くと、家鼠は急に顔の色が變つて、

お静かに／＼

と云つて息を殺して、小さくなつて居ました。處へ何時の間にもやらノソ／＼大きな猫が現はれて、

己の主人の倉へ忍び込んで居る奴は何者だ

と、喚きました。其聲が家中に響き渡つたものですから、山鼠は驚くまいことか、すくみ上つて

これが町に住むお前さんの幸なら、其れもよいかも知れんが、私はサア御免です。是よりか、貧しくも氣の置けない穴へ潜つて、粗末でも安心な野菜を食べて居た方が餘程よい、と、云ひました。

六一 平重盛

平重盛が、天子様の御殿の廊下を通るとき、小さな蛇が出ました。重盛は着物の袖でその蛇をつまんで、近侍のものに渡してやり知らぬ顔して通り過ぎました。重盛が廊下に居た蛇を、人の知らぬ様に袖でつまんで捨てさせた



いふのは、多くの人が之を見ると驚きさわぐから、人に知れぬやうに近侍のものにすてさせたのです。なんとおちついた人ではありませんか。

## 六一 悪戯な狼

ある處に一匹の悪戯好きな狼が住んでゐました。

或日のことに、羊の番をしてゐる犬の所へ参り、大層眞面目な顔をして、

犬君、君は僕と同じやうに獸の仲間で、形から何から能く似てゐる、唯だ違つてゐる所は、僕等は自由勝手に飛び廻つて暮すことが出来るけれども、君は人間の爲に首環をはめられ、人間の爲にいろ／＼用事を足さなければならぬ、君はそれを有り難

いと思つてゐるかね。

と、口に任せて申しますと、正直な犬は、

なるほど、君が云ふ通りだ。併しこれも神から授けられたのだから、今更何うとも仕方がないではないか、

と、聊か悄氣ながら申しました。すると狼は大きな口を開きて笑ひそれだから君は、不可ないといふのだよ、いくら神様から授けられたとは云ひながら、自分でつまらないと思つたら、つまるやうにしたら、よいだらう

と、云ふと犬は、

それでは、何うしたら、よいか

と眞剣になつて問ひました。すると、

それは何でもないことさ。君も斯うしてゐては甘いものも、満

腹食ふ事も出来まいから、これから乃公の友達になり、其處に  
 ゐる羊を乃公に呉れるのさ、すると直ぐに乃公が料理をして君  
 にも澤山に食べさせてやるよ

と、申しました。これ聞いた犬は、なるほど狼の云ふことは尤だ  
 此の羊さへやればこれから自分も甘いものが満腹食べられるから、  
 それでは君の云ふ通りにしよう、然し僕にも満腹食はしてくれ  
 なくては不可ないよ

と云ひながら、羊を連れて狼の窟へと行つたのです。そして狼は好  
 い言を言ひながら俄に恐ろしい牙を剥き出し

此の馬鹿犬め、

と、唯だ一と噛みに噛み殺し、驚いて逃げ出した羊の後を追ひかけ  
 飛びかゝつて一と噛みに噛み殺して了ひ、よい御馳走が出来たと喜

んでゐました。

やがて、もう食べてしまひましたから、牡の狼は、又先日 of やうな  
 旨い獲物があればよいがと思ひながら、村の方へ出て参りました。  
 すると何うしたとか、家の中で小供が何うすかしても泣き止みま  
 せん、流石の乳母も困り切つてゐるやうでありましたが、結局

お嬢さま、そんなにお泣き遊ばして、乳母の云ふ事をお聞きな  
 さらんと、彼の怖い狼に與て了ひますよ、

と、申しました。然し小供は、

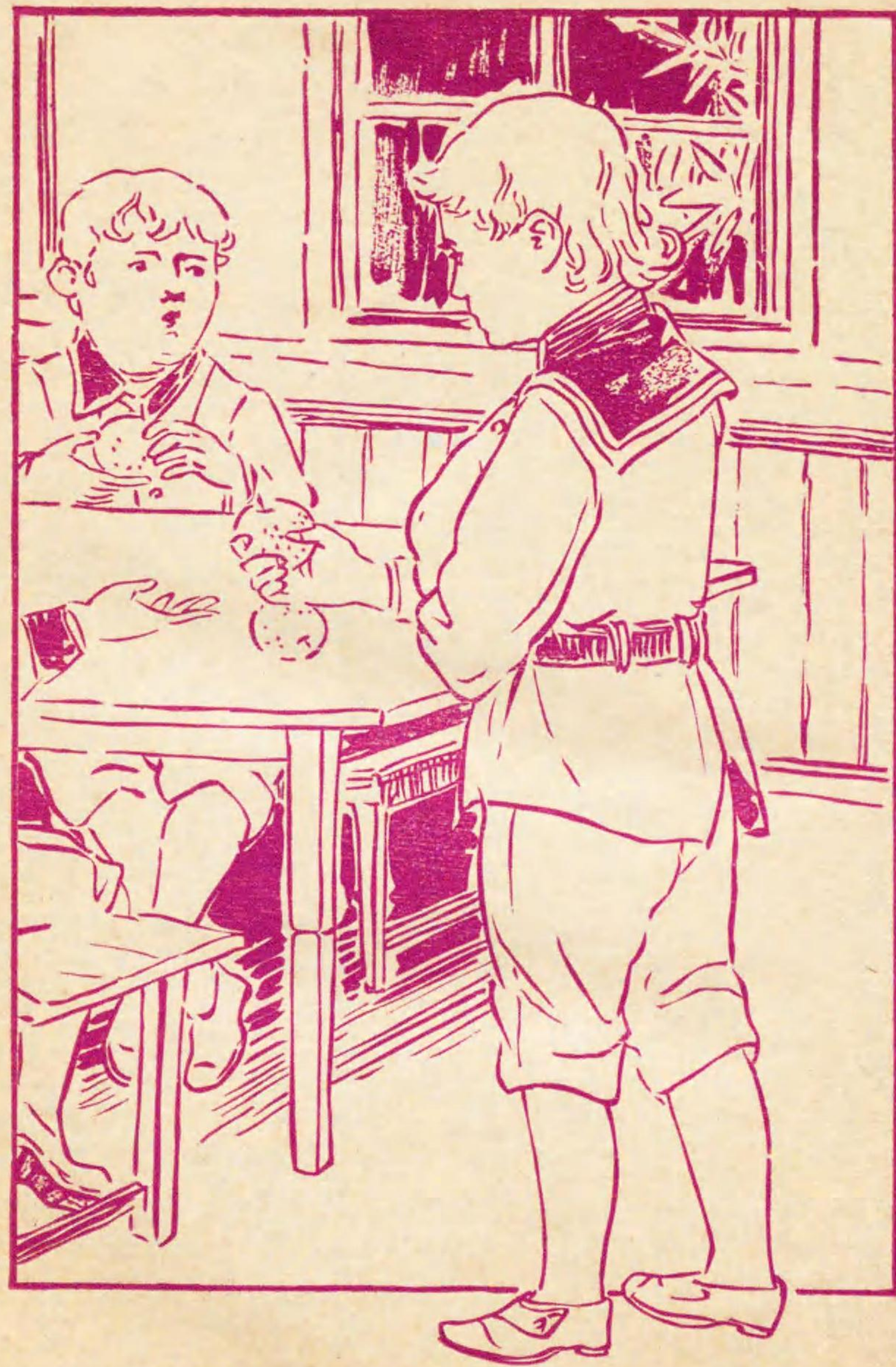
狼いやだア、いやだよ

と、猶一層大きな聲を出して泣きます。これを聞いた狼は、これは  
 又旨い食物にあり付いたぞ、今夜は人間の、然も未だ肉の柔らかい  
 小供が食べられるのか、と、ひとりで喜んで待つてゐました。

すると又乳母の聲がして、  
 サ、早くお黙り遊ばして、ねんねをなさい。今夜は最早遅いから、明日は狼にやつて了ひます、  
 と、云ふのが聞えました、狼は之を聞いて、オヤ今夜は呉れないのか、それでは明日の晩を楽しみにして、今夜は他へ行くことにしやうと、其の晩は歸りました。  
 翌日になると牡狼は、少しも餌を食べませんから、何うした事かと牝が聞くと、  
 今夜人間の、然も柔かい子供の肉を食られるから、今日は腹を減しておくのだ。お前も楽しんで待つてゐるがよい、  
 と、申しますから、牝も餌を控目にして、夜になるのを待つてゐました。

やがて、日が暮ると、牡は勇んで窟を出で、昨夜の家を指して參つたのであります。牝も餓しい腹を抱へて、牡の歸るのを待つてゐましたが、途中急に歸りません、待ちあぐんでゐますと、夜の明方になつて、牡は青い顔をしながら、漸くのことに歸つて來ました。牝が、

何うなさいました、  
 と、尋ねますと、牡は息も絶へるやうな聲をしながら、  
 否や、人間と云ふものは少しも當にならぬ、昨夜行つて尋ねてゐると乳母が、嬢ちゃんはお伶俐だから狼などにやるものですか、狼が來たら撲き殺してやる、と話をしてゐるから、これは大變だと思つてそれから他を尋ねたが些少も餌がない、こんな目に逢ふのも、俺が平素よくない事をした罰だ



時幼のソルネ

と、申しましたとサ。

六三 膳巴提使

今より一千六百年あまりの昔に、膳巴提使といふ人がございました。朝廷のお使で朝鮮へまゐりました。さうすると、ある雪の降つた晩に、そのお子様がなくなりました。巴提使は虎の足あとのあるのを見まはして、これは虎にくはれたのに相違ないと、その足あとなをつたうて虎の棲所に行つて見ました。すると果して相違はなかつたので、

我子のかたき

と、いきなり拳固で虎をなぐりました。虎は怒つて、大きな口をはつて巴提使にとびかゝつて來ましたから、巴提使は左の手で虎の舌

をにぎり、右の手で刀をぬいてその虎をさしころしてかたきをうち  
 ました。  
 なんとえらい人ではありませんか。

六四 ネルソンの幼時

ネルソンが小學校に通つてゐる時勇ましい氣象をあらはした名高い  
 話があります。  
 これは學校の庭に梨の木がありました、その實は生徒の賞品にあて  
 ることに定まつてゐました。處が甘そうに熟した時、校長先生お一  
 人のもちものとなつてしまいました。  
 それで生徒たちはがっかりして、一つあれを取つて、校長先生を驚  
 かしてやらうと、皆が相談をさめました。けれども校長先生がこわ



くて、たれも取りに行く人がありませんでした。  
此時ネルソンは此相談には這入つて居ませんでした。この様を見  
て、

それでは僕が引受やうといつて、夜になつてからひとりで木に  
のぼつて取つて來ました。

そして云ひました。

僕は諸君がいかにもいぢけて居るのを見てあまり生意地がない  
と思つたから取つて來てやつたんだ

と、いつて自分は一も取りませんでした。

### 六五 義貞の勤王

新田義貞は、源義家の血筋で、上野の國新田といふ處に領地を持

つてゐました。新田といふのは之が爲です。

或る時、北條高時が、畏れ多くも後醍醐天皇を隠岐の國に遷し奉り

て、金剛山に楠正成と戦争をした頃には高時の方でしたが、大塔

宮護良親王の令旨をうけて、自分の子の義顯や、弟の協屋義助を始

め、其の他忠義の家臣等と協議の上、愈々勤王の旗揚をして、北條

高時を討つ事になりました。

義貞は、軍勢を集めて彼の大塔宮の御令旨を読み上げ義兵を募つて

段々と進んで武藏の國まで攻め寄せた頃には、其の軍勢が凡そ二萬

人以上になりました。

北條高時は、義貞が義兵を揚げたと聞きましたから、急に一族の貞

國、貞將の二人を大將として、之に十一萬餘の人数をつけて繰出さ

せましたが、中々拒ぎされませんで義貞の軍はもう入間川を渡つて

來ましたから、愈々武藏野の原で大合戦となりました。彼是する中に北條方の軍勢は、たび／＼負けるので大層弱つてゐると、高時も其容子が案じられて又た跡から弟の泰家に數萬の人数を率いさせて加勢に繰出させたので、一時は勝利を得たこともありましたが、義貞は俄かに旗色が悪くなつたので、大そう心配してゐますと、其處へ相模の三浦義勝といふ大將が六千人の兵を卒ひて義貞の加勢に來ましたので、茲に再び關東勢は強くなつて、さすがの北條勢も負け戦が続いて、とう／＼鎌倉へ逃げ込むやうな事になりましたが、之と反對に義貞の關東勢の方は、次第／＼に人数も殖へて、頓て十二萬餘の大軍となりましたから、義貞は之を三手に分けて、三方から鎌倉に攻め入りました。

先づ先鋒の大將、大館宗氏と江田行義は極樂寺といふ處から進み、

堀口貞満と大島盛之は兒囊坂と云ふ處から攻め込み、義貞義助の二人は假粧坂といふ處から攻め込んで、火を五十餘個所に放ちながらドシ／＼進んで參りました。鎌倉勢も之には随分驚きましたけれど、まだ十餘萬の兵士がありますから一生懸命に三方の攻口を守らせて居りましたが、此時大館宗氏が討死しましたので、義貞は二萬の兵を卒ひて其の攻口へ廻りますと、折から闇の夜で、海には敵の軍船が澤山備へてありますから、どうにも進む事が出来ません。義貞は海の神様を祈つて、海の中へ自分の太刀を投げ込みましたが、不思議にも急に浪が干潮になりましたから、此處から攻入つてとう／＼北條高時を滅ぼしました。此の太刀を投げ込んだのが、今に名高い話になつてゐるのです。

### 六六 龜の失敗

龜は始終地面にばかり居るので、つくづく自分の身上が厭になり、一度は空へ上つて見たいと思つてゐました。そして或時、もし自分を連れて天上を見物させてくれる鳥があるならば、其の御體としてたくさんにお寶を隠してある洞穴へ案内しよう、と、吹聴いたしました。

すると驚が其の望みの通りにやつて来て龜を擡み、空中へ飛び上つて四方八方を見物させて、さて約束の通り寶の所在を尋ねました。すると龜は固より根のない事でしたから只もじくするばかりでした。

そこで驚は怒り出し、岩を目がけて龜を投出し、微塵に碎けたのを見澄して、急いで舞下り、残らず、其の肉を食つて了つたといふ事です。

### 六七 犬と影

犬が肉を啣へて、小橋を渡りますと、鏡のやうに綺麗な水に自分の影が映つたので、必然他の犬だと思ひ、其の肉も自分のより大きそうでしたから、俯いて之れを取らうといひました其の拍子に啣へて居た肉が口から落ちて、水の底へ沈み、取返しのかぬ損をいたしました。

### 六八 青年と猫

一匹の猫が或る青年を戀ひ慕ひ、其の愛を得んがために、姿を女に



變えようとして、其事を愛の神に祈りますと、女神も其志を哀れと思ひ早速美しい、女子に變じて、首尾よく青年と結婚させましたが、かくして兩人が仲よく一室に揃うて居るを愛の神は、猫の姿は變えてやつたものゝ、肝腎の性質が變つたか如何か、それを試して見ようと、目の前に鼠を一疋放しました。すると花嫁は、夫の居ることも忘れ、鼠に飛びついて取つて食おうとしましたので、女神も呆れ、姿と心と一致するように復元の猫に變えて了ひました。

六九 鳥の失敗

或る時、動物の王と云はれる獅子は、動物の親睦會を開くから、明日のお午迄に、王の許に、出頭せよと、云ふ意味の、お布令を出し

ました。其のお使には、猿と雀が撰ばれた、獸の仲間にお布令を云つて廻るのは猿の役目で、鳥の仲間には雀が役目となつた。扱て、愈々お布令が達せられると、凡ての動物は大喜びです。すると虎は

「親睦會出席の事に就て、評議したい事があるから、御苦勞ながら、今日の夕方まで、自分の處まで来て呉れるよう」に獸類、鳥類を通じ、兎を使として知らせました、皆の者は、時刻を違へず、虎の處に集りました、すると虎は「どうも皆様、御苦勞です、お召ひ申したのは外でもありません、明日王様の前で、親睦會が催される、それに就ては、始めての事でもあれば、誰でも、身分相應な事をして行くが肝要だと思ひます、

而し皆さんのお考はどうですかし

と云ひますと、狐が

「虎さんのお説は、最も事ですが、吾々は初めて、王様の御前に出るのですから、綺麗に、着飾つて行つてはどうでせうか」と云ふと、今度は牛のさばり出て

「モト、そんな評議は止めて、名々勝手にしたらどうか」と云ふ、今度は鼠が匍ひ出た、そして少さい鬚を捻りながら

「チウ義といふ事を忘れてはならぬ、それには皆、相當の贈物を持つて行つたがよからう」とやつた、すると猫が大きな眼玉をむいて

「ニヤンとも、仕事がない、これは投票したらどうか」と云つた、是には皆、賛成して、投票しますと、平常着の儘行つた

がよい、と云ふものが非常に多かつた。茲で評議も纏り、散會しました。

處が、鳥は怠惰で、虎の評議に行かず、

「皆の者は平常着の儘だから、俺は一番、綺麗な着物を着て行つて、

王様に褒められようと考へた、けれども、残念なことには、眞黒の着物一枚しか持ちませんから、どうすることもならぬ。鳥は腕拱ぬ

いで、考へて居ましたがハタと小膝を打ち、其まゝ、我家を飛び出しました、拐鳥はどうするかと見ると、鶏の羽や、孔雀の羽や、山

鳥などの綺麗な羽を拾ひ集めました。

愈々、其翌日になりますと、象でも虎でも豹でも兎でも狐でも狸でも猫でも鼠でも、燕も孔雀も、山鳥も四十雀も、七面鳥も、鶏も、平常着のまゝ、打揃つて、お午までに、王様の處に出ました。

すると猿は王様の命令に依つて、各々の名を一々読み上げる

「虎藏さん」

「ハイ」

「牛右衛門さん」

「ハイ」

「猫又さん」

「ハイ」

「鼠小僧さん」

「ハイ」

と云ふ風に順々と調べて来て鳥の番になつた

「鳥勘左衛門さん」

返辭がない、何度大きな聲で呼んでも居ない、其中に開會の時刻が

来て。獅子の王は

「サテ皆さん、此處に招いたのは、吾々動物は仲善く睦まじく暮し度い爲めであります、故に皆様は、此後、喧嘩口論を止めて親密に暮して下さる」

と述べた。王の演説が終ると拍手喝采、暫しは動も止まぬ程でありました

扱ても鳥は、孔雀や鶏や山鳥等の羽を身に着けて居ましたから、お午過ぎになつて、漸く王様の處へやつて來ました。之を見た王様は

「何物だ」

と呶鳴りますと、鳥は平身低頭して

「鳥勘左衛門でございます、遅れまして、洵に濟みませぬ」  
鳥の姿を熟々見た王様は、着物が違ひますから、不審に思ひ



陣先の綱高

「勘左衛門、其方の着物はどうしたのぢや」  
 「王様の御前へ、汚ない着物は失禮と存じまして着飾つて参りました」

と云ふと獅子王様は大喝一聲

「不埒不届な奴だ、他の着物を着て、我物顔をして居る、早速、其着物を脱取つて仕舞へ、動物の面汚しだ」

之を聞いた、他の者は、鳥の高慢痴氣を兼て憎んで居りますから、どや／＼立つて来ました

「これは俺の着物だ」

「これは私のだ」

「これは吾輩の常用着だ」

と鶏や山鳥や孔雀が各自に羽を抜き取つて裸にしてしまいました

獅子王様は殊の外の御立腹

「早速、摘み出して畢へし」

との嚴命、寄つて集つて、打つやら踏むやら叩くやら擲るやら、散々酷ひ目にあはせて逐出してしまいました、鳥は種々詫をしましたけれど、遂々許されず、仲間をはづされ一人法師になりました。其後では皆のものが、歌へや飲めやの大陽氣、猫の袋踊、狸の坊主踊、狐の嫁入藝當、兎の逆立、猿の輕業、などの餘興があつて、ドンチヤン／＼の大騒ぎをやつて、其日の夕暮れ、皆々愉快に面白く解散致しましたと云ふ事です。めでたし／＼

七〇 高綱の先陣

昔、近江國に佐々木高綱といふ人がありました。此の人は近江の國

に往んでゐましたから、人々が近江源氏と呼んでゐました。そして其時分は平氏が盛なる世で、世に平氏でないものは人でないといふ位でした。

然るに此度今まで伊豆國蛭が島へ流刑になつてゐた朝頼が此度義兵を擧げ、平維盛と富士川の近傍で戦争をするといふ事を聞き、

自分も源氏である上には、何としても頼朝に力を協せねばならぬ、

と思つて、すぐに馬に乗り頼朝のゐる相模國、鎌倉を指して急いで参りました。すると馬は野州川の邊まで行きますと、口から泡を吹いて斃れて了つたのです。流石の高綱も之には困り途方にくれてゐますと、ツイ近所に馬の嘶く聲が聞えるので飛び立つばかり喜んで、誰の持ち馬か知らないけれども、自分は今急ぎの用向で、此馬

がなくては困るから、無断で借りるのは悪いが、暫くの間拜借するぞ、

と、獨語を云ひながら、其の繋いである綱をば解き、今まで自分で乗つて来た馬の鞍をば乗せて用意をなし、ひらりとばかり飛び乗り、漸く四五間ばかり歩いた時、

こら、俺が馬を何とするだ、  
と、大きな聲をあげて、一人の百姓爺が飛んで参りました。高綱は仕方がないから、

オイ爺や、乃公は佐々木高綱と云ふものだ。急な用事として鎌倉まで行かねばならぬのだが、此處で馬を乗り斃したから、暫くお前の馬を借りる事にした、どうか暫く貸して呉れ、  
と、云ひながら馬を急がせると、爺は其の後を追ひかけながら、

いや、いけない、其の馬を取られちや此爺が困る  
と、いふのを耳にも掛けず、  
頼む、頼む、

と、云ひながら、早や野州川へと乗り入り後をも見ずに道を急ぎ、  
やつこの事で鎌倉へと着きました。すると頼朝は大そう喜び、

高綱殿か、かねての約束を忘れず、能くこそお出で下すつた、  
頼朝此上もない喜びだ

と、申しますと、高綱は、

有り難うございます。御承知の通り私は近江國から急いで参つ  
たものですが乗馬を乗り斃しましたから、どうぞ馬を一匹頂き  
たいものです

と、申しますと、頼朝は、

それは何より安い事だ、厩へ行つて何れなりと、氣に入つたの  
を撰り取りなさい。

と云ひました。高綱は大そう喜んで、自分で厩へ行つて多くの馬の  
中で一ばん優れてよいものを曳き出しました。頼朝は大そう驚き、

それは池月といふ馬だ、其馬は乃公が戦争に出る時乗る爲の馬  
であるから、その馬はあげる譯には行かぬ。他の馬ならば何で  
もない、

と、申しますと、高綱は、

それは一向受取れぬお言葉です。苟くも源氏の大將たるものが、  
一旦承知をした以上はいけぬと仰有るのは武士として誠に聞え  
ぬ話である

と、申しますと、頼朝も、

それでは頼朝から貰たとは皆に言ふてくれるな貴方の忠義が嬉  
しいからおあげいたします、

と、申されました。之を聞いた高綱は大そう喜んで、

それでこそ源氏の大將と云ふものです。此度の合戦に一番の難

所は宇治川であらうと思ひますから、其先陣は屹度此の高綱が

致して、此の御恩を報ずことに致します。

と、嬉し涙を流して頼朝の前を退り馬を早めて、義経等が陣してゐ

る浮島原を指して参りました。梶原は頼朝が大切にしてゐた磨墨と

いふ良い馬を貰つて、それに乗つてゐますから、此の軍の中で自分

ほど良い馬に乗つてゐるものはあるまいと、大さう自慢をしてゐま

した。

すると。其の丘の下に珍らしい勇ましい馬の嘶き聲がするから、梶

原は不圖耳を傾けながら、

彼の馬の聲は慥に池月の聲であるが、それとも自分の聞き間違

えか知らん

と、不思議に思つてゐますと、間違ひもなく頼朝が大切にしてい

池月に佐々木高綱が乗て来るのでありました。

これを見た梶原は、曩に自分が頼朝に頼んで、此の池月を貰おうと

したのに、どうしても貰ふ事が出来なかつた。それを高綱にやられ

るとは、頼朝公も判らないと腹を立て、若し其の様なお考えなら、

自分にも思案があると、眞紅になつて怒りながら、

其處へ参られたるは佐々木高綱殿ではござらぬか、少しくお尋

ね申したい事もあれば、此處にお立寄りを願いたい。

と、大きな聲で呼びかけました。之を聞いた高綱は、儲は此の馬の



ことで梶尾が腹を立てたと見える。然し未だ戦争もせぬ前から、味方同士の喧嘩も宜しくないから、何とか之は云ひ開きをせねばなるまいと、静かに馬を進めて丘へ登り

これは梶原殿でございましたか久しく面會を致しませんでした

が、御無事で愈々御盛んな事は結構でござる、

と、叮嚀に申しますと、梶原はつくづくと池月を眺めながら、

否やお互に暫くでした。時に甚だ突然の事ですが、貴殿の馬は

頼朝公が寵愛の池月と見ましたが、之れを何うして頂戴なされ

ましたか、

と、申しますと、高綱は大そう迷惑な顔をして、

それを問はれると、高綱まことに困ることがあるから、何うか

と、申しましたも、梶原が聞きませんから、

實は御承知の通りに自分は、近江の國から駈けて参つた所が、

鎌倉へ着くと自分の馬が斃れて用に立たない、仕方がないから

頼朝公に無断で厩へ参り此馬を曳き出したのだから、今にも頼

朝公から、どんなお叱りが来るかも知れないが、此の戦争の濟

むまでは生命を生き延ばしたいと思ひますから、何事もよろし

く頼みます、

と、まことしとやかに申しました。これを聞いた梶原は、今更ら羨

ましそらに池月を見てゐるばかりで、頼朝を恨む事は出来ません。

これといふのも高綱が、今大敵を前に控へてゐて、味方同志で喧嘩

をするのが善くないと思つて計つたものです。

それから富士川の合戦は平氏が、水鳥の羽音に驚いて逃げだしたの

で、源氏は逃げる後を追ふて、京都に攻め上り佐々木は義經の手に  
ついで宇治川の方へ等り、此處で梶原と先陣を争ひましたが、梶原  
が塔の島へ上つて、馬の腹帯を締めてゐるうちに、とうとう先陣を  
致して、初めに頼朝と約束をした通り立派な功名を後世まで残すこ  
とになりました。

七二 武藏坊辨慶

辨慶は、熊野の権現の辨正といふ坊さんの兒で、阿母さんは二位大  
納言といふ貴い御方でした。處が此の辨慶は尋常の人とは異つて十  
八ヶ月丁度一年半もお腹の中に居て、やつとの事で生れましたもの  
ですから、其時はもう齒も生へて居れば、頭髪も長く伸び、そして  
足も達者に歩いて居ました。何しろ阿母さんは此様な大きな兒を産

むんだものですから、お産がすむと間もなく、死んでしまいましたし  
た。此時御父さんは大そうおこつて云は、親殺しと同然だから捨て  
てしまふ方がよいといつて居ましたが、辨慶の妹で山井三位といふ  
人の奥方が之を聞いて、何卒其兒を妾に下ださいといつて京都につ  
れて参りました。

山井三位は此兒を叡山の觀慶阿闍梨といふ豪い坊さんのお弟子にい  
たしました、段々馴れて参りますと、そろそろ悪戯を初めまして、  
亂暴な遊戯をやつて居りましたが、お師匠様の阿闍梨は之を聞いて  
とうとう辨慶を捕へてもう外へ出る事はならぬと、坐敷の牢へ入れ  
てしまひました。

或晩の事、辨慶は隙を狙つて座敷牢を脱出し戶外へ行つて太い丸太  
を拾て来て、

さアもう自暴だ、思切り暴れてやるぞ、  
 と、此の丸太を振り廻して門を破るやら塀を壊すやら、當るを幸ひ  
 暴れ廻りましたから坊さんも、只呆れて手を出さず一同逃げてし  
 まひましたので自分で武藏坊辨慶と名をつけて、とうとう叡山を飛  
 び出してしまひました。此時丁度十七であつたそうです。  
 さて辨慶は、散々暴れて叡山を出ましたが、まづ大坂から舟に乗つ  
 て、阿波の國へと渡り、四國を残らず歩行いで、それからまた播磨  
 の國へ参りましたが、この國の書寫山といふお山は、叡山にも負け  
 ない位な大きなお寺のある處ですから、この山へ登つて暫時修行を  
 して行かうとやがて此處のお弟子になりました。  
 處が此の書寫山の太勢のお弟子の中に信濃坊海圓といふ坊さんが居  
 りました。或日の事辨慶がお寺のお座敷で一人で晝寢をして居りま

すと海圓は其處へやつて来て、唐突墨と筆を持って来て辨慶の頬邊に  
 下駄といふ字を大きく書いて其儘行つてしまひました。辨慶は皆の  
 者がクス／＼笑ふものですから、手水鉢の處へ来て自分の顔を映し  
 て見ますと、丁度頬の處に下駄と大きく書いてあります。辨慶は之  
 を見て、太い檜の棒を取るが早いか一同の處へやつて参りまして、  
 この入道奴等、よくも乃公の寢て居る中に、顔へ樂書をしやが  
 つたな。  
 と、眼を皿のやうにして怒鳴りつけました其中に氣の強い連中が四  
 五人ばかり前出て、  
 何だこの坊主奴、自分が勝手に晝寢をしながら、其間に悪戯  
 をされたからつて、腹を立てる奴があるものか、  
 と、一番威しつけましたが、辨慶はビクともしません、持て居た棒

を取り直して擲つたかと思ふと、其處に立て、居た四五人の坊主は一時にバラ／＼と椽側から下へ、跳ね飛ばされてしまひました以前いせんの海圓はお竈の下に焚材の燻へてあつた一番大きくて火の付いたのを引つこ抜いで、

やい辨慶、樂書の主は乃公だ、

と、言ながら打つて掛りますと、辨慶も心得て、

貴様は信濃坊か、腕づくとは面白い、さア尋常に勝負をしやう、

と、二人でお庭へ飛び下りて、此處で暫く闘つて居りましたが、其中に辨慶は、海圓の襟首と、腰の處をグツト攪んで、目よりも高く指しあげてしまひました。信濃坊は、指しあげながら、

辨慶さん降参だ／＼私が悪かつたから堪忍々々

と、意氣地もなく謝罪しましたけれども、辨慶はなか／＼承知いた

しません。そして此度は高さの一丈二三尺もある、御堂の屋根へ投り揚げますと丸で球でも投げたやうに、お庭の石の上へ落ちて、海圓はとう／＼死んでしまひました、そして其の焚材の火は御堂へ燃へ付いて大變な火事になりました。辨慶は悠々と見物しながら其儘又京都へ歸つてしまひました。

そして此度は一番追剝になつて往來の人の刀を千本だけ取つてやらうと、それからといふものは、每晚五條の橋へ出かけまして、刀を佩して通るものがあれば、唐突此方から喧嘩を吹き掛け、其奴の刀を取りあげて、逃げる奴は追かけもせず、向つて来る奴は薙刀で、譯なく擲つてしまひ、九百九十九人まで追剝をして刀も九百九十九本まで取りましたが、如何してもう一本で千本になるのですから、今度こそはよい刀が取れるだらうと、晩方から支度をして、例の五條